芥川龍之介「手帳七」考続貂　附図版・翻刻・略注・筆記用具一覧表

――普及版『芥川龍之介全集』における「手帳より」の編纂事情と堀辰雄――

章　瑋

稿者は本誌第四五集（二〇二二・三）に、「芥川龍之介「手帳六」考続貂　附図版・翻刻・略注・筆記用具一覧表――「奇遇」との関係を起点にして――」と題して、一九二一年に芥川龍之介が大阪毎日新聞社の特派員として渡中した際に使用した「手帳六」の翻刻と論考を発表した。本稿はその続稿に当たり、芥川のもう一冊の手帳である「手帳七」を取り上げる。「手帳七」は、同年六月中旬から滞在した北京のほか、帰国直前に立ち寄った大同や天津などのメモが記されている。「手帳七」の翻刻に際しては、前稿と同様に、藤沢市文書館で撮影した写真データをもとに、画像編集ソフト Photoshop を用いて色調を補正した上で翻刻した。

なお、本稿では岩波書店から刊行された複数の『芥川龍之介全集』について言及しており、これらを区別するために現行版『芥川龍之介全集』（一九九五～九八年）の「後記」における分類に倣い、左記の略称を用いている。

〈元版全集〉　全七巻・別冊一巻　一九二七～二九年
〈普及版全集〉　全一〇巻　一九三四～三五年
〈前回全集〉　全一二巻　一九七七～七八年
〈現行版全集〉　全二四巻　一九九五～九八年

一　「手帳」と「手帳より」における異同問題

前稿において、稿者は「手帳六」の翻刻史（「手帳七」も同様）を「第一期【昭和初期】」・「第二期【平成初期】」・「第三期【平成十年代】」に分け、それぞれの時期における手帳の状態、及び翻刻の担当者並びに編纂方針を確認しうる範囲でまとめたが、疑問を一つ残していた。それは、『芥川龍之介全集』間の異同問題である。[1] つまり、「第一期【昭和初期】」に分類した〈元版全集〉別冊に、主として堀辰雄が翻刻した「手帳」と、葛巻義敏と堀辰雄が〈元版全集〉を意識し、「増訂普及版」[2]と称して編纂した〈普及版全集〉第九巻に収録された「手帳より」とでは、翻刻に異同が生じている。

〈普及版全集〉が「増訂」したための異同ならば理解しやすいが、「手帳より」に限定してみれば、「増訂」というよりもむしろ減少している箇所が多い。そのためか、主として〈普及版全集〉所収本文を底本としていた〈前回全集〉第一二巻も、[3]〈元版全集〉の「手帳」

を底本に「手帳（一―十一）」として収録している。そして「後記」において、「なお普及版全集所収本文は「手帳」の抄録であり、体裁も元版全集のそれとかなり異るがその異同については一々注記しない[4]」と記し、両者の間に異同があることを示しつつも、具体例やそれらが生じた背景については触れなかった。〈前回全集〉は「著者自筆の草稿、手帳等に直接当ることがほとんどできなかった[5]」という制約の中で編纂されたとはいえ、結果的に「手帳」と「手帳より」の異同問題は不透明なままになっていたのである。

そしてこの問題は、芥川の直筆資料の多くが山梨県立文学館・日本近代文学館・藤沢市文書館に寄贈され[6]、資料の確認がしやすくなった〈現行版全集〉編纂時においても解決していない。〈現行版全集〉第二三巻は、原資料を直接確認できるようになったことによって、〈元版全集〉の「手帳」に収録された一二冊のうち「七冊に該当する手帳、及び一冊の新たな手帳の原資料」を確認し、六〇数年ぶりに「可能な限り原資料の状態を再現することを旨として翻刻[7]」し直すという大きな成果を挙げた。しかし、原資料が参照できるようになったことと、〈現行版全集〉の充実した翻刻によって、〈普及版全集〉の「手帳より」が参照されることは少なくなり、この問題の存在感が薄れてしまった[8]。

今回、「手帳七」の翻刻に際して参照した『芥川龍之介資料集　図版2』（山梨県立文学館編、一九九三・一一。以下、『図版2』）の中に、右に述べた異同問題の説明に繋がる資料を見つけたので、第三節で詳述するとともに、改めて〈普及版全集〉における「手帳より」の位置づけと、堀辰雄がどのような姿勢で翻刻したかを論じたい。

二　「手帳より」の位置づけ

繰り返しになるが、〈前回全集〉の「後記」は、〈普及版全集〉の「手帳より」が、〈元版全集〉の「手帳」の「抄録」だと位置づけている。「抄録」と見做したのは、内容の減少が原因だと思われるが、「体裁も元版全集のそれとかなり異[9]」なった理由は別にあると考える。例えば〈普及版全集〉の内容見本に言うように、「編纂・校正上にも前回の全集により一層の厳密正確を加へたく、今回も再び直接原稿に基いて校合[10]」したことによって生じた可能性である。「手帳より」の編纂方針を示す文章はほかに見当たらないが、〈元版全集〉所収「手帳」と対比することによって、「手帳より」がどのように翻刻しているかを浮き彫りにさせることができよう。

〈元版全集〉の「手帳」は、【例一】のように箇条書きで翻刻されている。各条の頭にある○印は、翻刻担当者の堀辰雄が付けたものである[11]。この○印を目安に何条あるかを数え、集計したデータを【表一】にまとめた。

【例一】〈元版全集〉「手帳」の冒頭部分

一

○ 3 Weaknesses in the (i) desire for worldly powers. (baseness, cowardly) (ii) sensuality. (iii) indolence. Don't forget these are my death-enemies!

○一月十六日。弟、岸と共に来る。晴日。

○一月十八日。久米土屋来る。大龍寺へゆく。夕日。夜ベルリオをよむ。興奮する。

一方で〈普及版全集〉の「手帳より」では、【例二】のように○印はすべて削除されている(後述するが、○印の削除は堀自身による)。おそらく内容上繋がりがないと判断した場合のみ、行間に「＊」を挟んでいると思われる。「＊」の数は○印と対応しないので、このままでは〈元版全集〉の「手帳」と比較することはできない。

【例二】〈普及版全集〉「手帳より」の冒頭部分

一

3 weaknesses in the

i) desire for worldly powers ／baseness

ii) sensuality ＼cowardly

iii) indolence

Don't forget these are my death-enemies!

＊

〔大正五年〕

〔一月十六日〕弟、岸と共に来る。晴日。

〔一月十八日〕久米、土屋来る。大龍寺へゆく。夕日。夜ベルリオをよむ。興奮する。

そのため、「＊」や改行の有無にかかわらず、やはり「手帳」の○印を基準に、「手帳より」の相当する部分を一条として【表二】にまとめた(例えば、「手帳」の「○ 3 Weaknesses(中略)death-enemies!」を一条としたのに対し、「手帳より」では「3 weaknesses(中略)death-enemies!」を一条分として計数した)。また、「手帳」にはあるが「手

未収録	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
	○印なし	○印なし	56	92	175	79	119	138	67	148	116	88	

【表一】〈元版全集〉「手帳」

補遺			七	八	六	未収録	未収録	五	四	三	二	一	変更
	⬇「軽井沢日記」	未収録	23	49	97			83	54	91	48	32	減
			18	22	39			35	9	32	60	47	異同あり
			15	21	39			20	4	25	8	9	異同なし

【表二】〈普及版全集〉「手帳より」

4	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	増

【表三】〈普及版全集〉「手帳より」(増補分)

帳より」に翻刻されていない内容を「減」としている。加えて両者の異同も計数したが、その際には○印や「＊」の有無は考慮していない。ただし、改行を含む意図的な変更が行われたと判断した場合は「異同あり」に計上し、明らかな誤植など意図的でないものに関しては「異同なし」に計上している。

なお、〈元版全集〉の「手帳」にはなく、〈普及版全集〉の「手帳より」で増補された内容は、「＊」の数を目安に計数し、【表三】に示している。

大きな相違点から述べると、【表一】のように「手帳」には一二冊の手帳が収録されているが、【表二】のように「手帳より」では「手帳六・七・十一・十二」の四冊分が収録されていない。なお、このうち「手帳十二」に当たる「西洋紙のレタア・ペエパアに書かれそして手帳の間にはさまれてゐたもの」[12]は、「軽井沢日記」の表題を付して、「手帳より」とともに〈普及版全集〉第九巻に収録されている。[13]

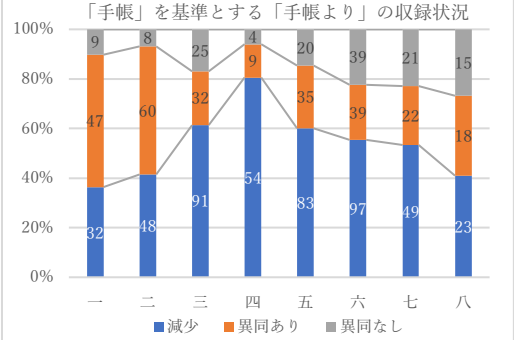
他方、「手帳より」で増補された内容として、【表一】の「手帳八」と対応する【表二】の「六」の末尾に追加された三箇所[14]と、「補遺」としてまとめられた四つの断片[15]がある。加えて、【表一】の「手帳九・十」と対応する手帳について、【表二】の中で順番が入れ替わっていたことも見逃せない。これらの変更は、「手帳より」が単純な「抄録」ではなく、より高次なレベルで〈元版全集〉の「手帳」を解体し、「手帳より」として再構成していたことを示唆しよう。

もちろん【表二】の二行目に示したように、【表一】から減少している項目も多い。ただしここで重要なのは、むしろ三・四行目に示した、「手帳より」の収録項目における異同の割合である。改めて【表二】の各項目をグラフ（【図一】）で表したい。

青色で表したのは、【表二】の「減」の項目数である。縦軸の目盛を参照すれば、減少分が全体の約四割から八割を占めていることが分かり、「手帳」で翻刻されていた内容の多くが「手帳より」に取り込まれていないことが分かる。

一方で、減少分以外は、「手帳より」に取り込まれた部分になる。これらは、おおよそ二割から六割を占めている。これをさらに橙色と灰色に分け、橙色で「手帳」からの「異同あり」、灰色で「異同なし」を示す。「異同あり」と「異同なし」がそれぞれ占める割合に注目すると、大部分で異同が生じていることが分かる。

【図一】



この「異同あり」は、「手帳より」の中で行われた「増訂」の所産と見ることもできる。このことを踏まえて灰色の「異同なし」について考えると、「異同なし」は「手帳」の項目をそのまま再録したと解釈するよりも、むしろ「異同あり」と同様に、「手帳」を「直接原稿（稿者注、この場合は手帳の原資料）に基いて校合」[16]し、訂正す

る必要がなかったから「異同なし」となった、と考えたほうが自然であろう。そうであれば、〈普及版全集〉内容見本の「編纂・校正上にも前回の全集により一層の厳密正確を加へた」[17]という記述は、決して誇大広告ではない可能性が高い。

〈普及版全集〉の「手帳より」が「増訂普及版」[18]に値するのであれば、青色で表した「減少」、ないし「手帳より」から除外された「手帳六・七・十一」の意義も、問い直す余地がある。常識的に考えて、直筆資料を「増訂」したと主張していながら、かえって収録内容が減少している場合には、いずれかの段階で「増訂」したという翻刻が大幅に削除されたことになり、その理由としては編纂者などが「増訂」の精度を疑問視したことなどが想定される。しかし、本当にこのような事情であったのかどうか、見極める必要がある。その一端を示してくれたのは、前掲『図版2』に収録された「支那游記ノート」である。

三　堀辰雄の努力

石割透は「支那游記ノート」について次のように解説している。

「1」から「5」までは、[19]神楽坂盛文堂製二百字詰め原稿用紙を使用。『芥川龍之介資料目録　自筆草稿類』には、「堀辰雄筆写　半九枚」とある。（中略）これらのノートは、中国旅行の際の、折々のメモであろう。「1」は、旅程の地図だが、（中略）「2」に記されている「国子監」は、（中略）北京の国子監を見学した時のメモか。芥川の紀行文では、とりわけそこを訪れた感想は記されていない。元版全集（別冊）の『手帳七』には、「乾隆玉座。（中略）○道流仰鏡（咸豊帝）藍ニ金。・・・・」などとある。が、この「手帳七」には、図は描かれていない。「3」は、「北京日記抄」（「改造」一九二五・六）の「一　雍和宮」に記されている「雍和宮」についてのメモ。元版全集などの「手帳七」の、「○赤壁。黄瓦。緑瓦壁（半分）。大理石階。○黄、赤、紫のラマ。黄色の帽（bishop）。○惜字塔（青銅）。」とあり、その他の記述はないようである。「4」「5」「6」は、同じく「手帳六」に記されている。「7」は、堀辰雄によってか、「大正十年四月十六日上海にて島津四十起と句会」と記されているが、詳しいことは現在のところでは不明である。「4」から「7」の、活字になっていることの理由は、全集編集時におけるものかと推測されるが、詳しいことは現在のところ明らかではない。（以下省略。[20]傍線稿者）

右の解説が書かれた一九九三年当時、〈元版全集〉に翻刻された「手帳六・七」の原資料はまだ藤沢市文書館に寄贈されておらず、原資料を参照することができなかったため、明らかになっていないこともあった。これらの不明点について補足しつつ、改めて「支那游記ノート」と「手帳六・七」との関係、並びに〈普及版全集〉における「手帳より」の編纂事情を概観したい。

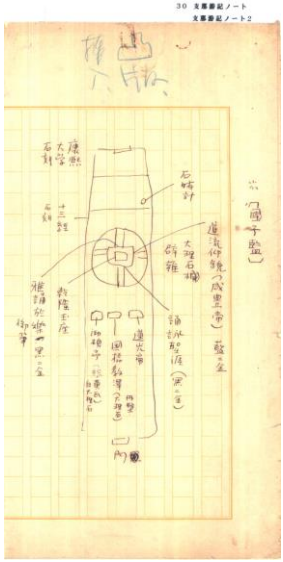
引用に戻ると、まずここで挙げられた七枚中、「2」から「6」までの五枚に注目したい。この五枚はいずれも堀辰雄が〈普及版全集〉

の「手帳より」のために作成したものと考える。「支那游記ノート」は元々〈普及版全集〉のもう一人の編纂者である葛巻義敏が所蔵していたが、石割が挙げた『芥川龍之介資料目録　自筆草稿類』（以下、『目録』）の著者であり、三茶書房主・故岩森亀一に資料の所有権が移っていた。その岩森が作成した『目録』に、「堀辰雄筆写」と記されていることが確証となる。

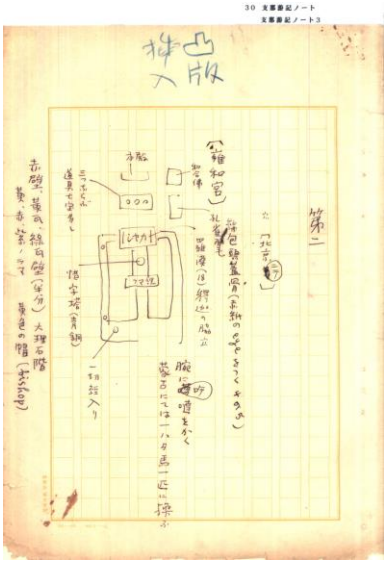
加えて、使用された「神楽坂盛文堂製」原稿用紙も堀と判断する手がかりの一つとなる。同原稿用紙は、前掲『図版2』に収録された「堀辰雄筆写の「開化の殺人附記」など」にも使用され、「堀辰雄筆写」の注記が二箇所ある。これは「普及版全集（第九巻）に『開化の殺人』附記」の表題のもとに、収め」るために、「堀辰雄が筆写したもの」[21]とされている。「支那游記ノート」も同様の目的と見てよかろう。よって、堀辰雄が〈元版全集〉に続き、〈普及版全集〉の「手帳より」も翻刻したのである。

そこで「支那游記ノート」の内容について確認したい。石割がすでに指摘したように、これらの中の「2」「3」は「手帳七」と関係し、「4」「5」「6」は「手帳六」と関係している。この指摘を踏まえた上で「手帳六・七」の原資料と比較し、新たに分かったことを左に記す。

「2」「3」（【図二・三】。山梨県立文学館提供、以下同じ）は〈元版全集〉の中で省略された図を、[22]「手帳七」の原資料（本稿六六頁・五六頁）に基づいて、黒インクで原稿用紙に写し、それと同時に図の説明や同じ頁に書かれたメモなどの増訂も行っている。また、堀辰雄による地名の説明（「＊〔国子監[23]〕」「〔雍和宮〕」）や補足（「＊〔北京ニテ〕」）と、加筆した「第二」の見出しが認められる。さらに両方とも原稿用紙の上部欄外に、確言はできないものの、葛巻義敏か岩波書店の編集部などの他筆（青鉛筆）による「凸版挿入」の編集指示が記されている。堀が写した【図二・三】を元に凸版を製版し、できる限り忠実に、原資料の再現を図っていたことが見て取れる。



【図二】



【図三】

一方で「4」「5」「6」（【図四・五・六】）は、印刷された「手帳六」の本文をもとに、以下のように手を加えている。

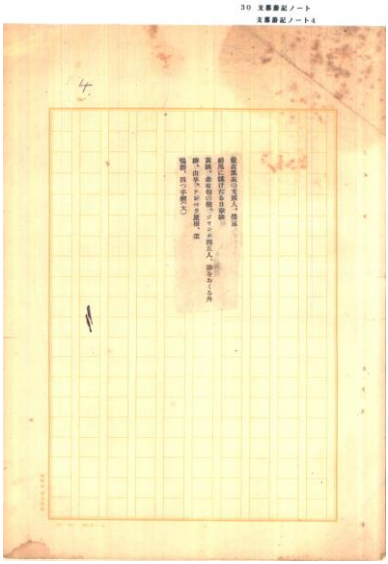
① 翻刻が印刷されている紙を、行・単語レベルで切り取る。ただしこの時は、堀自身が付けた○印は切り取らない。

② 必要に応じて、切り取った紙片を原稿用紙の上で並べ替え、改行の位置を調整してから原稿用紙に貼り付ける。

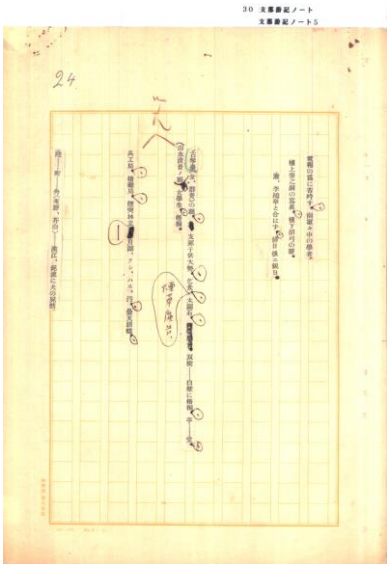
③ 貼り付けた紙片を本文として、黒インクで記号や誤植などを中心に校正を行う（【図四】は訂正なし）。

④ 必要に応じて、黒インクで説明（「＊〔漢口―鄭州―洛陽〕」「〔義井舗？〕」）を書き込む。

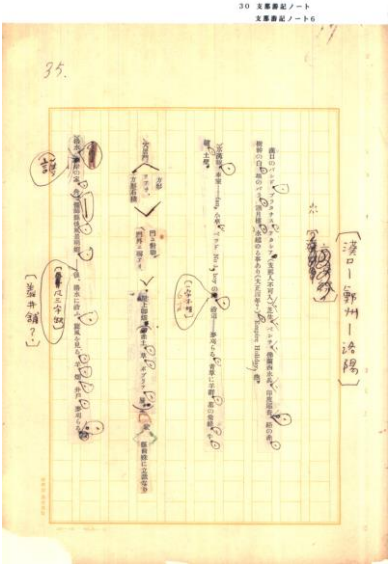
これらのほかに、原稿用紙の左上欄外に、黒インクで頁番号が記載されている。また、堀によるものかの判断はできないが、色鉛筆による「ツメル」や「6ポ」などの編集指示も書き込まれている。



【図四】



【図五】



【図六】

堀による改行や記号の訂正の傾向、並びに亀甲括弧を用いた説明の仕方は、〈普及版全集〉の「手帳より」に見られる異同の傾向と

類似し、【図四・五・六】のいずれもその〈入稿原稿〉に当たるものと推定できる。また、原稿用紙左上の頁番号「4.」「24.」「35.」は、少なくとも三五頁以上の分量がまとめて作成されたことを示している。そのうえ、前稿で触れたことではあるが、〈普及版全集〉の「月報」第五号（一九三五・三）に、同年七月刊行の第九巻の予告として、「手帳六」の写真とともに、「手帳―支那旅行当時―（第九巻収録）」と示されていた。したがって、少なくとも三月の時点で、「手帳六」を収録すべく、堀の増訂作業は着々と進んでいた。

しかし〈普及版全集〉の「手帳より」に、〈元版全集〉の「手帳六・七」に当たる手帳が収録されていないことは、第二節で述べた通りである。【図二】から【図六】までのような〈入稿原稿〉が存在し、堀の手から離れていたことを示す、他筆と思われる編集指示が書き込まれていたにもかかわらず、なぜお蔵入りとなったのであろうか。

堀が清書した原稿が葛巻義敏（「支那游記ノート」は葛巻のコレクションであった）あるいは岩波書店の編集部に送られてからの経緯は、資料が見当たらないためもはや知る由もない[24]。しかし、堀と堀が担当した「手帳より」に限って言えば、堀は増訂に尽力し、現在活字として確認できる「手帳より」以上に、〈入稿原稿〉を作成していたのである。あるいはそれらの中に、第二節の【図一】において、青色で表した「減」の一部も含まれていたかもしれない。

さらに付け加えると、堀が残したものと思われる、【図四・五・六】に貼り付けている紙片の正体の手掛かりがある。それは「手帳六」の原資料の頁に挟まれていた活字の紙片である。これらの紙片について、水沢不二夫は「原資料には旧版全集を切り取った小片が十個余りも挟み込まれていた。岩波書店、或いは、旧所蔵者の葛巻義敏氏は、旧版全集刊行後も更なる判読を試みていた証であろう[25]」と指摘しているが、いくつかの補足を加えたい。

現在確認できた紙片（【図七】〔藤沢市文書館蔵。表裏、ただし中央の紙片のみ、左右の紙片と表裏が逆になっている〕。紙片の一例、三個一組）は、合計一二個あり、いずれも【図五・六】と同じ形で切り取り、原稿用紙に貼り付ける前のものと思われる。それぞれの紙片は両面で印字されているが、そのうちの一面には文字や文が途中で切られた傾向があり、使用する面と原稿用紙に貼り付ける面を決めたうえで切り取ったものと推測できる。また、表裏の文字列の構成は、〈元版全集〉の「手帳六」と一致しており、〈元版全集〉の頁から直接切り取ったものであろう。

【図七】表

【図七】裏

これらの紙片は前稿で述べた「手帳六」の修補に際して、挟まれていた頁から取り出され、個別にポリエステルフィルムに封入され

ている。したがって、かつて挟まれていた頁の確認は困難であるが、一部のみ、修補前に撮影されたマイクロフィルムに写されている。確認できたコマ（藤沢市文書館所蔵 ID65 文書（葛巻文庫）。資料番号 96-12-000097・98・101・102。うち【図七】が挟まれていた見開き 101 を【図八】として示す[26]）に挟まれた紙片の内容は、それらを挟んだ頁に記された内容と一部重なり、紙片は前述のような意図をもって挟まれたことが窺える。

【図八】

以上に述べたことから、堀が〈普及版全集〉の「手帳より」のために、どのように「手帳六」の増訂に取り組んでいたかが分かる。そのすべてが、「手帳より」の所収本文として実ったとはいえないが、このような丹念な作業に対しては、正当な評価が与えられるべきであろう。

四　「手帳七」の翻刻

以上、前稿で整理した「手帳六」（及び「手帳七」）の翻刻史、とりわけ「第一期【昭和初期】」のうちの〈普及版全集〉に収録された「手帳より」の実態を詳らかにした。「手帳六・七」は「手帳より」に収録されていないが、堀辰雄がこれらの清書稿となる「支那游記ノート」の【図二～六】を作成していることを、翻刻史に加える必要があるように思われる。さて本題の「手帳七」に戻ると、翻刻に先立ち、「手帳七」について改めて整理したい。

まずは櫟原直樹「葛巻文庫の芥川龍之介自筆資料―ノート断片・草稿断片・手帳―」（『藤沢市文書館』紀要二一、一九九八・三）から、「手帳七」の部分を引用したい。

> 年代、発行元不明。表紙は破損して無い。縦一二四ミリ、横六五ミリ、横罫線入り、左開きか。記述は、左ページから右ページの順に鉛筆と青インクを使用。本文一一二ページ中、記載九四ページ。手帳六に引き続き、中国旅行の際と推定されるメモが並ぶ。元版全集本文との比較で、八カ所の省略があり、他に二十一カ所に見学寺院などの図示がしてある。また、元版全集本文最終部分の「一籃の暑さ照りけり巴旦杏…」以下の部分は、本資料には記述が無い。（写真の引用は省略）

「手帳七」の基本情報に関しては櫟原の報告、並びに本稿の翻刻に譲るとして、「本文一一二ページ中、記載九四ページ」とされていた頁数について、私見を加えたい。

前稿で紹介したように、現在「手帳七」の原資料は「手帳六」と同様に、寄贈後の修補に際して折丁が解体され、中の頁は開いた状態で一枚ずつ重ねられている。したがって、本来の頁順や欠損頁の有無を知るために、撮影・印刷した「手帳七」の資料写真を折丁ごとに組み直し、出来上がった複数の折丁を順番通りに重ねて冊子状に戻す必要がある。その方法は前稿に譲るとして、同じ工程を経て組み直した「手帳七」の情報は次のようになる。

「手帳七」は六つの折丁を重ねて作られている。そのうち五つの折丁は二〇頁分で、左開きした時に上から四番目になる折丁のみが一六頁分となっている。この折丁に四頁分の欠損があるとすれば、本来「手帳七」は一二〇頁を有していたことになる。欠損に関しては、このほかに一番目の折丁の最初の二頁分もなくなっている。前稿の方針を踏襲し、これらを白紙で補ったうえ、左開きに合わせて左から順に通し番号を付した。

ただし、四番目の折丁の欠損頁に関しては、〈元版全集〉の翻刻や手帳の染みなどから得られる情報がなかった。そのため、私に手帳の内容によって判断し、欠損があると見られる通し番号六七～七四の間を白紙で補ったうえで、欠損した四頁と現存する四頁に仮の通し番号「六七?～七四?」を付した。したがって、この八頁分の実際の順番は、前後する可能性がある。

翻刻に関しては、前稿同様、メモがある頁の図版を一頁ずつに分割して掲載し、翻刻を行った上で、必要に応じて略注を施した。また、〈元版全集〉の翻刻を引用し、〈現行版全集〉の頁番号を併記することで利便をはかった。翻刻の構成は、下図（【図九】前稿より再掲）の通りである。

【図九】翻刻の構成
（反転タイプあり）

凡例

一、底本には、稿者が撮影した藤沢市文書館所蔵の「手帳七」の写真を用いた。藤沢市文書館の許可なく、転載・転用および複写することを禁止する。

一、〈元版全集〉別冊による「手帳七」の翻刻を併記し、〈現行版全集〉第二三巻の頁番号も記した。

一、〈元版全集〉に収録のない箇所や、句読点を含めて異同がある箇所は赤字で示し、そのほかは黒字で示した。

一、底本には全頁の通し番号がなく、開き方の判別もできないが、左開きの手帳として使われていたため、左開きの最初の頁から順に私に頁番号を付した。

一、六七～七四頁の間に欠損頁があり、頁順が特定できないために仮の頁番号「六七?～七四?」を付した。

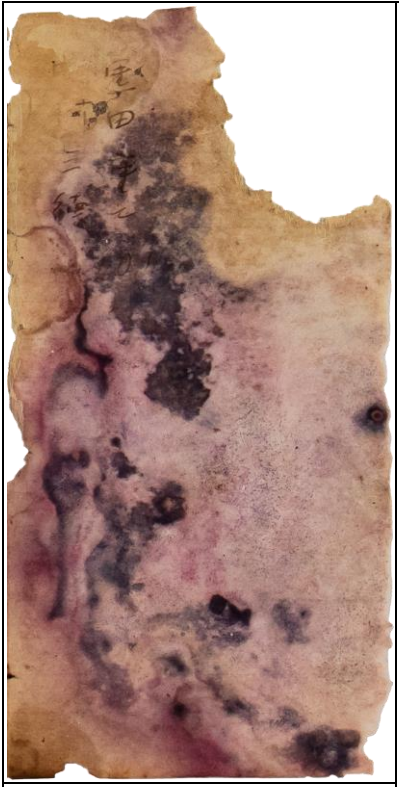
一、改行・挿入記号・挿絵・挿絵の注記などは、可能な限り底本の

ま翻刻した。

一、底本で旧字・異体字が使用されている場合、可能な限り底本通りに翻刻した。略字は通行の字体として翻刻した。なお、同一の漢字の字体の差異に関しては、〈元版全集〉との異同に計上していない。

一、翻刻に際し、判読できない部分は「□」で示した。判読できず、かつ文字数も不明の箇所は、「[約一行不明]」のように示した。

一、存疑の箇所は網かけで表した。

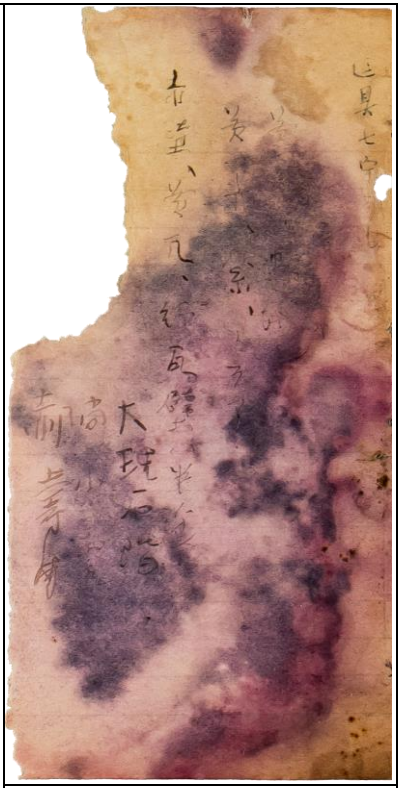


3

□□三徳　黒田□二

□01

全集未収録



10

道具七宝多し

黄色の帽（bishop）

黄、赤、紫、ノラマ

赤壁、黄瓦、緑瓦壁（半分）

大理石階

尚小雲

郝壽臣

○赤壁。黄瓦。緑瓦壁（半分）。大理石階。○黄、赤、紫のラマ。黄色の帽（bishop）。

元版 p816/現行版 p377

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕

【郝壽臣、尚小雲】波多野乾一の「北京と芥川龍之介」（『大陸』改造社、一九四〇・六）によると、芥川が北京に到着してから、「北京選り抜きの戯迷」（観劇狂）辻聴花と波多野に最初に案内された芝居は「いづれ聴花老ひゐきの女形尚小雲か、私の好きな郝壽臣（敵役）かの芝居だつたらう」という。なお、「尚小雲」の名前は【「北京日記抄」四　蝴蝶夢】にも見られる。

□包頭蓋骨（赤紙、の eye をつく 4 or 5）

孔雀羽毛

蓮華□

羅漢（18）釈迦の脇立三

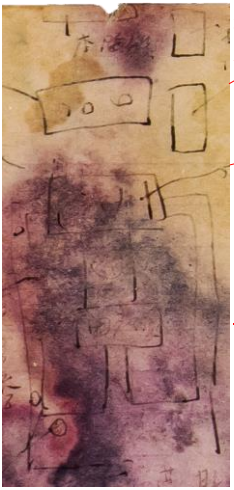
シヤカ

□ラマ像

和合

佛

本□殿



腕に哈噠をかく

蒙古にては一ハタ□馬

一匹に換ふ

三つならぶ

惜字塔

青銅

一切経入り

11

前掲【図三】を参照されたい。

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕

【哈噠】「哈」に見えるが「嗒」の誤りか。嗒噠〔Katag〕は、チベット文化圏において改まった場面で贈り物・供え物として用いられる帯状の布。芥川は「ハタ」と音読みしているが、現在は「カタ」「カター」と表記されることが多い。

○惜字塔（青銅）。

元版 p816/現行版 p377

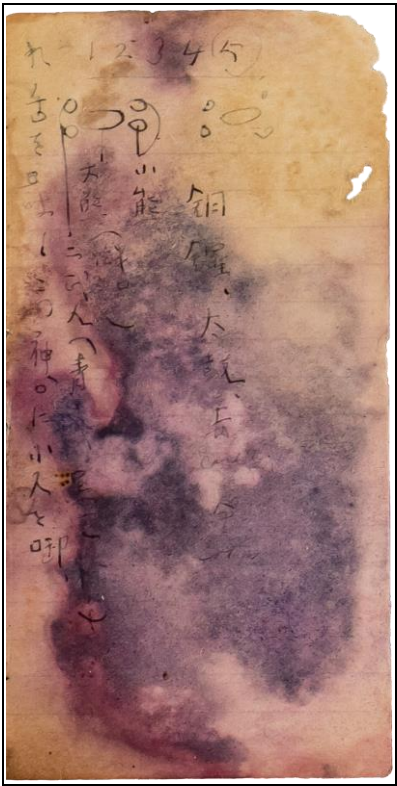
12

1馬に人皮をかけ上にまたがる人頭逆に垂
2象首の女をふむもの
男　男に対す
4女に牛臥せるあり　上に男　牛皮を着たる小
手に幡、孔雀羽、独鈷戟
男□数手　女両手　人頭飾（白赤）
3青面赤髪、綠皮、髑髏飾、火焔背
和合佛第六所东配殿、繡幔

○和合佛第六所東配殿。繡幔。3青面赤髪。綠皮。髑髏飾。火焔背。男數手。女兩手。人頭飾（白赤）。手に幡。孔雀羽。獨鈷戟。4女に牛臥せるあり。上に男。牛皮を着たる小男、男に對す。2象首の女をふむもの。1馬に人皮をかけ上にまたがる。人頭逆に垂

元版 p816/現行版 p377

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕



13

1　2　3　4　⑤

銅鑼、太鼓、赤
C［約一行不明］
金
［約一行不明］

小熊
大熊（半口怪物）

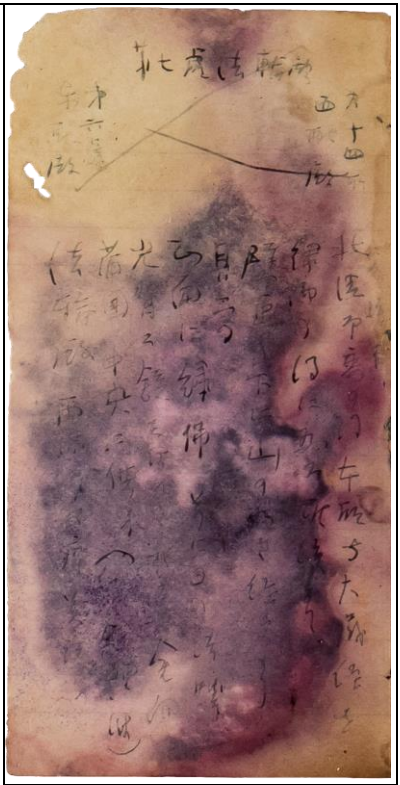
二武人（青面、黒毛槍）

れ舌を中吐し　この神、口に小人を啣、

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕

れ舌を吐しこの神、口に小人を啣。○大熊（半口怪物）。小熊。二武人（青面、黒毛槍）。○銅鑼。太鼓。赤、金

元版 p816/現行版 p377



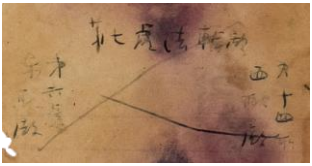
14

○法輪殿。兩側ラマ席。黃綠の蒲團。中央に供米。（boy 鯉、波）光背ニ鏡をはめた小像（金面）。正面に繡佛。前に白い法螺貝二つ。壁畫の下に山の如き經文あり。繡佛の後に五百羅漢あり。北清事變の後本願寺大藏經を寄贈す。

元版 p816/現行版 p377

第十四所
西配殿

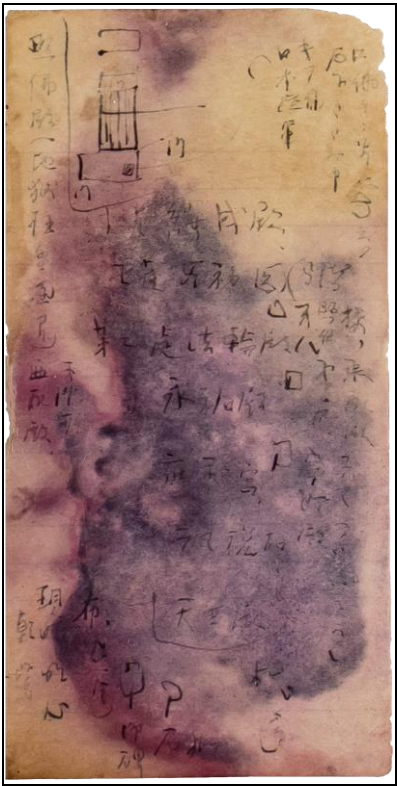
第七處法輪殿



第六處
东配殿

寄贈す。
北清事変の後本願寺大藏経を
繡佛の後に五百羅漢あり。
壁画の下に山の如き経文あり
貝二つ
正面に繡佛　前に白の法螺
光背ニ鏡をはめた小像（金面）
蒲團　中央に供米（boy 中鯉　波）
法輪殿　両側ラマ席　黄緑の

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕



15

に佛あり前に 立つ
石お たたみ中
キフ佛
日本陸軍
門

門

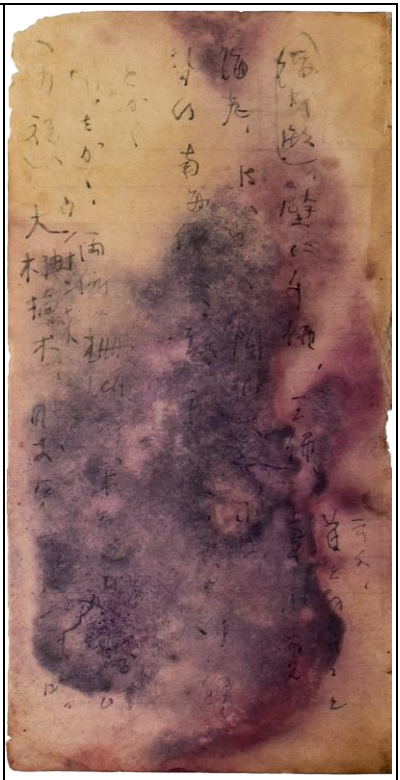
十處綏成殿、
九處万福閣（3階）
第八 照佛 樓、
第七處法輪殿
第6所 東配殿
五永祐殿
雍和宮、 寧阿殿 ラマラツパをふく
ラマ説碑
天王殿
布袋（金） 槐□
現妙明心
乾隆
御碑 石獅

第14所
照佛殿（地獄極楽図アリ）西配殿。

○照佛殿。（地獄極樂圖アリ）○第十四所西配殿。十處綏成殿。九處萬福殿（三階）。第八照佛殿。第七處法輪殿。第六所東配殿。五永祐殿。雍和宮。ラマ說碑。寧阿殿（ラマラツパをふく）。天王殿。（布袋（金）。現妙明心。乾隆。御碑。石獅。槐。）

元版 p816/現行版 p377

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕



16

○萬福。大栴檀木（ウンナン來）、七丈。片手に（右）嗒噠をかく。兩側に珊瑚樹（木製）あり。嗒噠をかく。○背後南海佛陀。龍。龍面人。鬼。鷗。鯉。海老。波。岩。陶佛大一小二。
○綏成殿。壁に千佛。三佛、賣不賣、首を切らると云ふ。

元版 p816～817/現行版 p377

云ふ。
首を切らると
綏成殿、壁に千佛、一二佛、賣不賣
海老、波、岩、陶佛大一小二、
背後南海佛陀、龍、龍面人、鬼、鷗　鯉
をかく　アリ
噠をかく、両側に珊瑚樹（木製）
ウンナン来　七　、
大栴檀木、□丈片手に（右）嗒　 　噠
万福、

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕

赤壁）木像に衣をつく mogol〈式　赤舌あり（左）、
関帝殿（途中、石敷、コブシの大葉
と云ふ　あけてから、指爪があると云ふ、
坊主　幕をとるにいくらかくれと云ふ　和合佛でない
人頭飾、手に手、足、首、弓、鉞
右足鳥、人をふみ左足、獸、人をふむ
□　万福閣手前の楼上、馬面多頭の怪物
黄面、白面、青面、赤面、

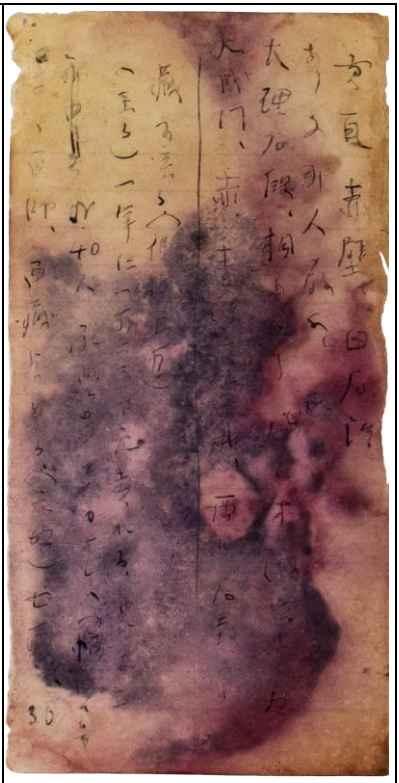
17

萬福殿手前の楼上。馬面多頭の怪物（黄面、白面、青面、赤面）。右足鳥、人をふみ左足、獸人をふむ。人頭飾。手に手、足、首、弓、鉞。坊主幕をとるにいくらかくれと云ふ。和合佛でないと云ふ。あけてから、指爪があると云ふ。○關帝殿。（途中、石敷、コブシの大葉、赤壁）木像に衣をつくmogol式。赤舌あり（左）。

元版817/現行版p377～378

黄瓦　赤壁、白石階
あり　支那人教ふ。
大理石段、欄も然り。碑に李鴻章の物
大成門、赤、青綠金天井、両側、石鼓あり

藏に至る。（佛□五万）
へ至る）一年に一万二三千元賣れる。蒙古西
永豊号 or 40 人　永豊号最もよし、（恒豊号
□ラマ画師、西藏より来る、（元明）七軒。30

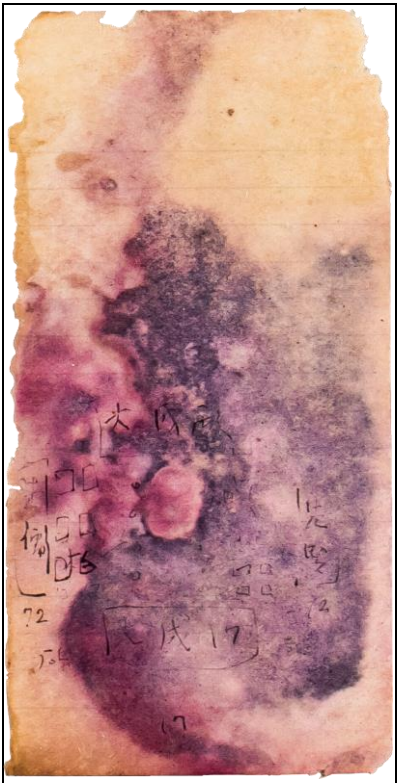


18

○ラマ畫師、西藏より來る。（元明）七軒。30 or 40 人。永豐號最もよし。（恒豐號へ至る。）一年に一萬二三千元賣れる。蒙古西藏に至る（佛□五萬）。
○大成門。赤。青綠金天井。兩側、石鼓あり。大理石段。欄も然り。碑に李鴻章の物あり。支那人教ふ。黃瓦。赤壁。白石階。

元版 p817/現行版 p378

【「北京日記抄」一　雍和宮】〔雍和宮〕
〔文廟（孔子廟）〕



19

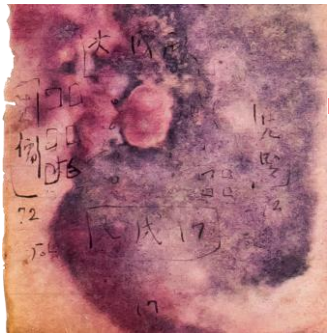
大成殿、

先儒

72

柏

碑



□□

先賢

72

石

鼓

大成門

門

全集未収録

〔文廟（孔子廟）〕

大成殿

1　2　2

青銅鼎、燭架、花瓶（大理石台）

梁、天井、金綠、

床に棕櫚氈

左　聖

子神位（朱へ金）　右右に四賢、

述聖孔子

復〃顏子

宗〃曾子

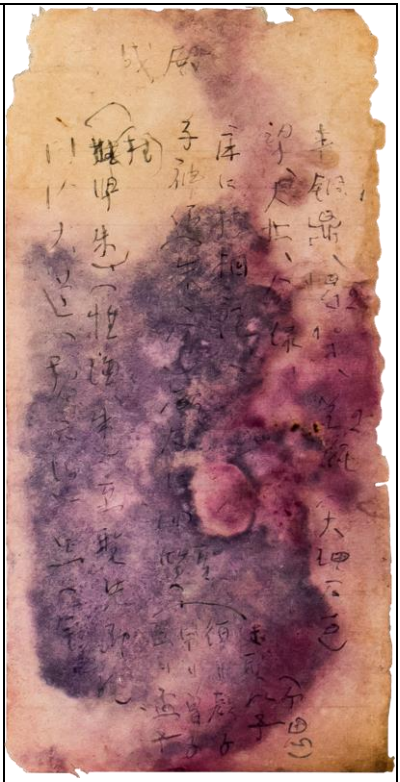
亞〃孟子

（子思）

（柱）

（□梁朱）（祀壇、朱）　至聖先師孔

同治大道（黎元洪）　黑へ金



20

○大成殿。同治大道（黎元洪）黑へ金。（柱朱）（□壇、朱）至聖先師孔子神位（朱へ金）。左右に四聖賢〔亞孟子、宗曾子、復顏子、述聖孔子（子思）〕。床に棕櫚氈。梁、天井、金綠。青銅鼎1。燭架2。花瓶2。（大理石臺）。

元版 p817/現行版 p378

〔文廟（孔子廟）〕

【同治大道（黎元洪）】大成殿内正面中央に掲げられている扁額。黎元洪書。正確には「道治大同」。

□流仰□鏡（咸豊帝）藍ニ金

時　大理石欄

石□計　辟雍　誦詠聖涯（黒ニ金）

道光帝

赤　丹壁

国橋教沢（大理石）

（緑黄瓦）

白大理石

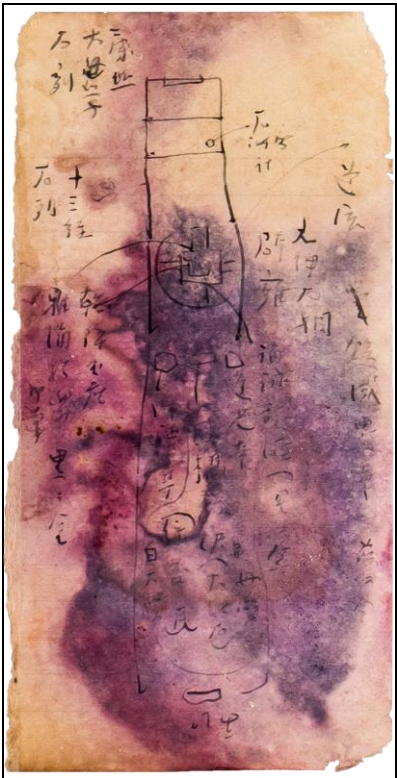
門黒

康熙　御碑亭

大□学　十三経　乾隆玉座

石刻　石刻　雅涌於楽　黒ニ金

御筆



21

前掲【図二】を参照されたい。

〔国子監〕

【雅涌於楽】辟雍殿内正面（北）の扁額。正確には「雅涵於楽」。

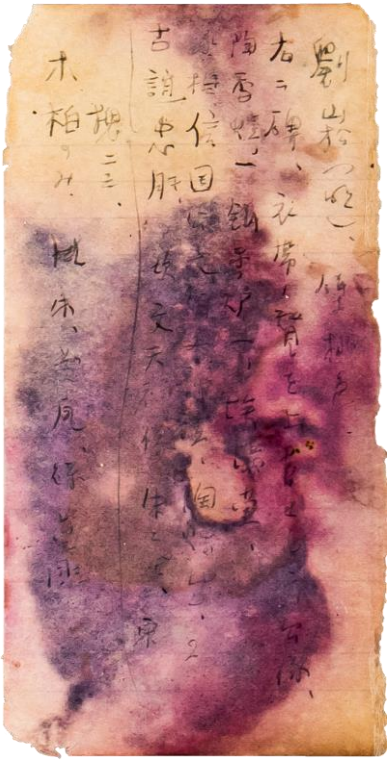
【誦詠聖涯】同（南）扁額。正確には「涵泳聖涯」。

【□流仰□鏡】同（東）扁額「萬流仰鏡」。

【国橋教沢】正門（黒い門）と辟雍殿との間にある牌楼に彫られた文字。正確には「圜橋教澤」。

○乾隆玉座。雅誦於樂（御筆）黒ニ金。○道流仰鏡（咸豊帝）藍ニ金。○誦詠聖涯（蓮光亭）黒ニ金。○國橋教澤（大理石）丹壁。○御碑亭（白大理石、緑黄瓦）。○辟雍、大理石欄。○康熙大學石刻。○十三經石刻。○石時計。

元版 p817/現行版 p378



22

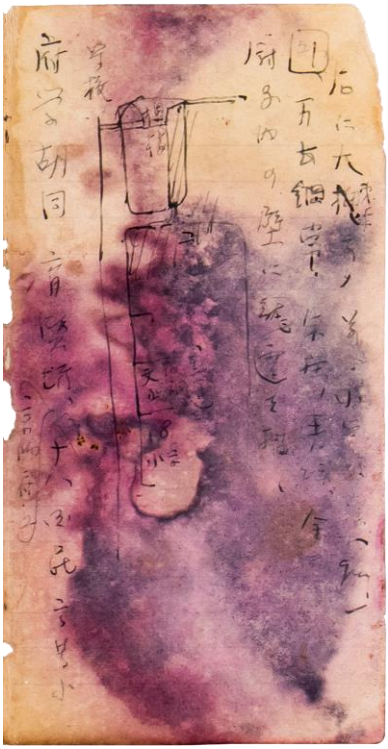
劉崧（明）、壁桃色。
右ニ碑、衣帯ノ賛を上書せし文公像、
陶香爐、一　鐵香炉一、埃満堂、
丞相信国公文公之神位、陶燭台、2
古誼忠肝、の額　文天祥像　朱と金、宋
槐二三、
木、柏のみ、中朱、黄瓦、緑藍彫

○木、柏のみ。槐二三。朱、黄瓦、緑藍彫。
○古誼忠肝の額。文天祥像。朱と金。宋丞相信國公文公之神位。陶燭臺2。陶香爐一。鐵香爐一。埃滿堂。
○右ニ碑。衣帯ノ賛を上書せし文公像。○劉崧（明）。壁桃色。

元版 p817/現行版 p378

【「北京日記抄」五　名勝】〔文天祥祠〕

【「北京日記抄」五　名勝】〔文天祥祠〕



23

○府學胡同育監坊。京師府立第十八國民高等小學校。○厨子内の壁に雲龍を描く。外、萬古綱常、朱柱、青綠、金なり。右に大棗あり。前は小學教室（grey）

元版 p817～818/現行版 p378～379

棗

右に大槐あり　前は小学教室（grey）

外、万古綱常。朱柱、青綠、金なり

厨子内の壁に龍雲を描く

門

牌楼

学校

府学胡同　育賢坊、第十八国民高等小

（黒へ金）

京師府立

相祠

文丞

18

小学

鐘庫胡同

隊

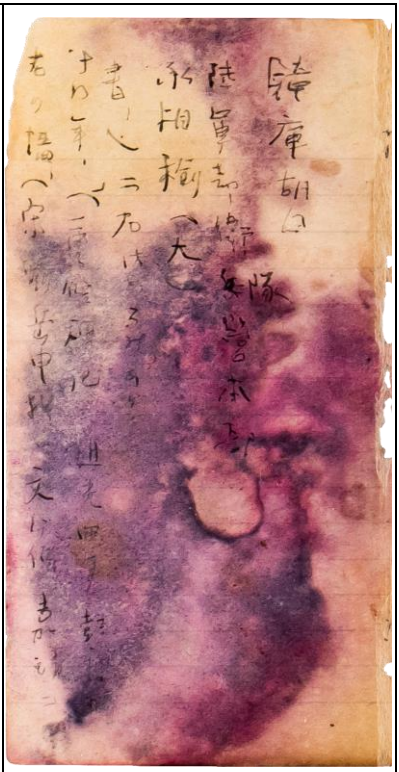
陸軍部衛乘營本部

丞相楡（大）

書）二石はめこみあり。

十八年）（重修碑記　道光四年彭邦疇

右の墻、（宋劉岳申撰の文公傳　嘉靖二



24

○右の墻（宋劉岳申撰の文公傳嘉靖二十八年）（重修碑記道元四年彭邦疇書）二石はめこみあり。○丞相楡（大）。○陸軍部衛隊營本部。○鐘庫胡口。

【「北京日記抄」五　名勝】〔文天祥祠〕

元版 p818/現行版 p379

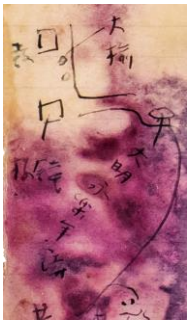
鐘周土瓦堆積す。

遊ぶ、犬二三匹、永楽五鐘一

周囲 grey houses

つき当りに門、子供たち

槐 榆 大榆 教 楼鐘



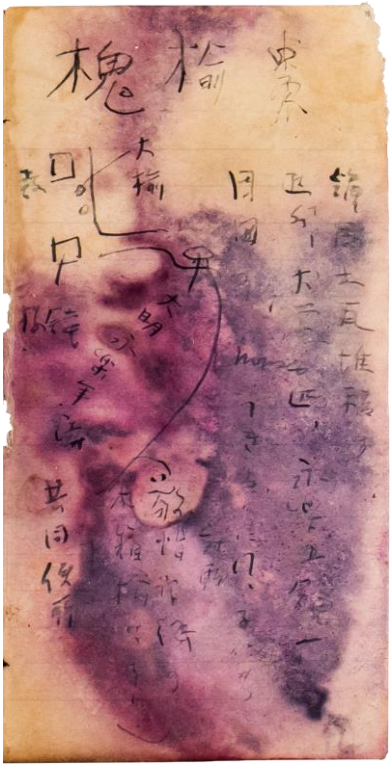
大明永楽年鑄

□□

敬惜字紙の

木箱□い、なり

共同便所



25

【「北京日記抄」三　十刹海】〔永楽大鐘〕

【敬惜字紙】文字を書いた紙を粗末にせず、「敬惜字紙」などと書かれた箱や籠に入れ、本稿五六頁の「惜字塔」（【「北京日記抄」一　雍和宮】）といったような特定の場所でまとめて焼却する習俗。

○大明永楽年鑄。共同便所。周圍 grey houses. つき當りに門。子供たち遊ぶ。犬二三匹。永楽五鐘一。鐘周土瓦堆積す。

元版 p818/現行版 p379

は新聞社へとりに行く。
一時　おそきは二時　日本人の急ぐもの
（車を引けば走れる）故に新聞は十時十
達は走るを得ず（騒動を生ずるを恐る）
北京新聞は多き時50に余る。これらの配
逆によむ
白話報は二人にてよむ為両方より
茶館へ新聞を持ち廻るは借すなり
よむものは三十戔但紙共なり
新聞　一月六十戔はよんで返し　一日遅れに
（五百　部　新聞のタゼ）
イによまる所以

26

○新聞。一月六十錢はよんで返し一日遅れによむものは三十錢但紙共なり。（五百部新聞のタゼイによまる所以）茶館へ新聞を持ち廻るは借すなり。白話報は二人にてよむ爲兩方より逆によむ。北京新聞は多き時50に餘る。これらの配達は走るを得ず。（騒動を生ずるを恐る。）（車を引けば走れる。）故に新聞は十時、十一時おそきは二時。日本人の急ぐものは新聞社へとりに行く。

元版 p818/現行版 p379

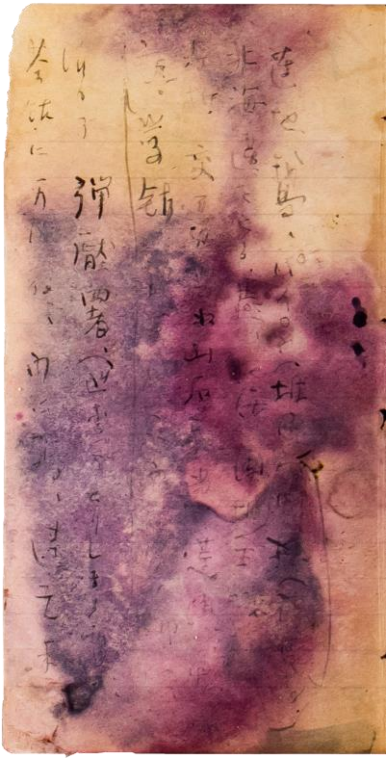
【「北京日記抄」三　十刹海】〔十刹海〕

ものあり、　左側通行を令する巡査
柳と人家にあり。人力車　驢にのりてすぐる
歩く　支那のハイカラ、　杏賣り、斜日向う中の
右手を垂直ニ下グ
め腰をかがめず（ロチを思ふ。）道士と巡兵士と
人
拆字、中丹賣り、旗人の妻（礼は膝をかが
葺、覗き眼鏡、見せ物、（はりねづみ、大蝙蝠）、
白布のテエブル
十刹海　岸は柳、楡、茶館はアンペラ
男女は夫婦も別席

27

○十刹海。岸は柳、楡。茶館はアンペラ葺（白布のテエブル、男女は夫婦も別席）。覗き眼鏡。見せ物。（はりねずみ、大蝙蝠）折字、人丹賣り。旗人の妻（禮は膝をかがめ腰をかがめず、右手を垂直ニ下グ。）（ロチを思ふ。）道士と兵士と歩く。支那のハイカラ。杏賣り。斜日向うの柳と人家にあり。人力車。驢にのりてすぐるものあり。左側通行を令する巡査。

元版 p818/現行版 p379



28

蓮池　鵞、パイロウ（堆雲）牌楼（積翠。）
北海　蓮をとる。燕、北海　團城　玉蝀橋
左折　交番　泰山石敢当　蓮濠　男
訳学館　北京大学第三院　柳　河

開かず　弾壓署、（巡査がとりしまる所）
茶館に万国旗、田に鵲、蓮花未

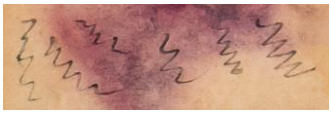
茶館に萬國旗。田に鵲。蓮花未開かず。彈壓署。（巡査がとりしまる所）。
○諷學館。北京大學第三院。柳。河。左折。交番。泰山石敢當。蓮濠。男蓮をとる。燕。北海。團城。牌樓（積翠）。玉蝀橋。蓮池。鵞。パイロウ。（堆雲）

【「北京日記抄」三　十刹海】〔十刹海〕
〔訳学館　北京大学第三院（北河沿）〕
【「北京日記抄」五　名勝】〔北海〕

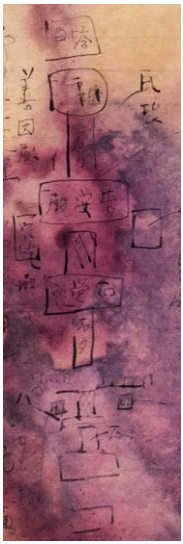
元版 p818/現行版 p379～380

【「北京日記抄」五　名勝】〔永安寺〕

ラマ佛□　三ダン
瓦製　石窟
壁　聖果殿
ラマ　石□　石タン　石ダン　亭（乾隆□）

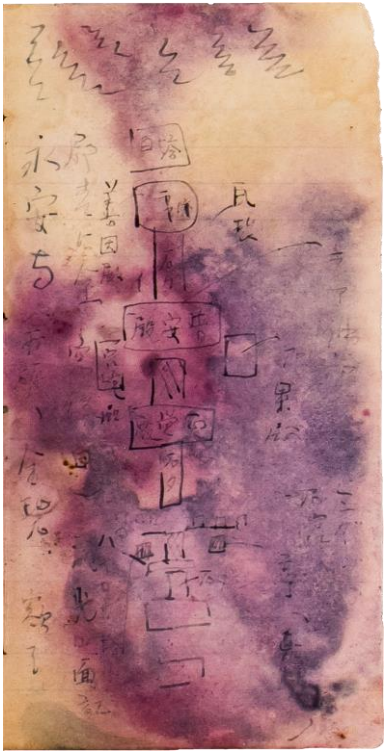


白塔



善因殿　イ安殿　普宗境殿　覚正殿　パイロウ　塔山　龍光　四面記

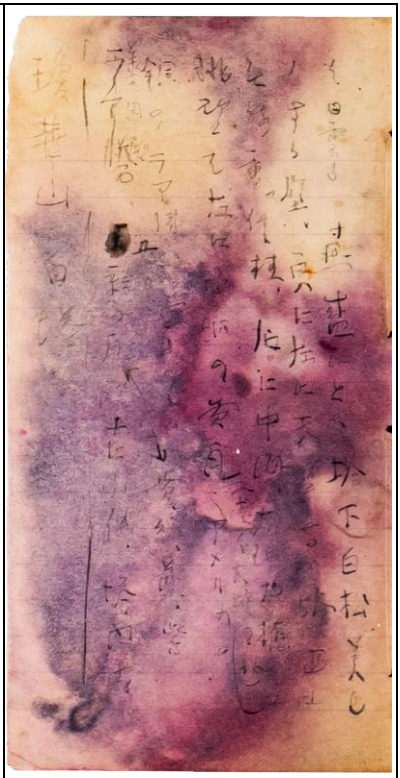
群青に金　窓縁白）
永安寺（赤壁、金碧。　額は



29

○永安寺。（赤壁、金碧、額は群青に金、窓縁白）

元版 p819/現行版 p380



30

は曇る　燕盛にとぶ　塔下白松美し

分する壁、更に左に天寧寺の塔　西山

無線電信柱。右に中海、大理石橋を二

（遠く天壇の楼）

眺望は左に宮城の黄瓦　アメリカの

銅のラマ佛（angry）をまつる　黄、緑、藍、紫

善因殿　五

ヤ塔、彩の瓦、壁に小佛。塔内青

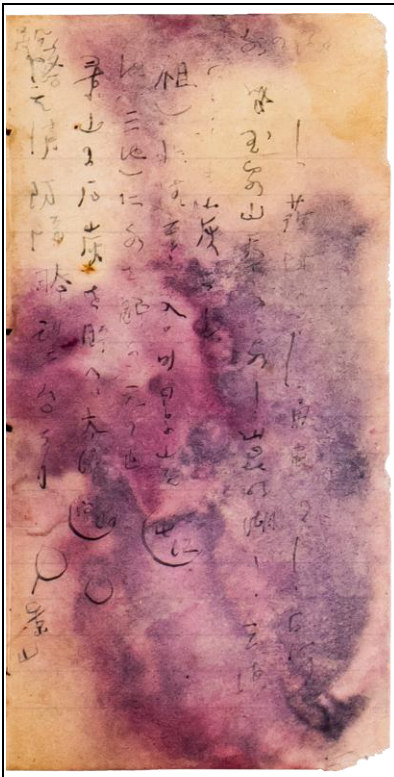
瓊華山　白塔山

○瓊華山。白塔山。

○善因殿。五彩の瓦（黄、緑、藍、紫）。壁に小佛。塔内青銅のラマ佛（angry）をまつる、眺望は左に宮城の黄瓦（遠く天壇の楼）、アメリカの無線電信柱。右に中海、大理石橋を二分する壁。更に左に天寧寺の塔。西山は曇る。燕盛にとぶ。塔下白松美し。

元版 p819/現行版 p380

【「北京日記抄」五　名勝】〔永安寺〕



31

水の流れ方

——護城河——通惠河——白河

中玉泉山天下第一泉——崑明湖——三海

ほりしも炭なし

祖）北清事変の時景山を

池（三池）に水を貯ふ（元の世

景山に石炭を貯へ、太液

殿堵は消防隊瞭望台なり

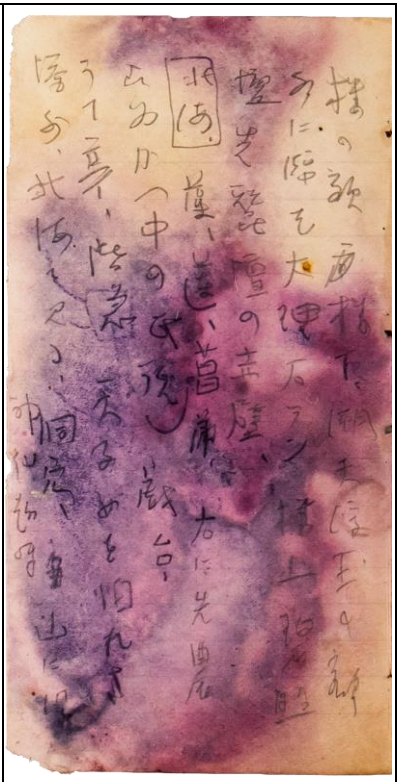
殿は消防隊瞭望臺なり。景山に石炭を貯へ、大液池（三池）に水を貯ふ。（元の世祖）北清事變の時景山をほりしも炭なし。〇水の流れ方、

——玉泉山天下第一泉——崑明湖——三海

——護城河——通惠河——白河。

元版 p819/現行版 p380

【「北京日記抄」五　名勝】〔永安寺〕



32

○塔外、北海を見る。洞穴（神仙趣味）。山に沿うて亭。階急。天子女を怕れさす爲か。（中の氏説）戲臺。○北海。藻。蓮。菖蒲。右に先農壇、先蠶壇の赤壁。水に臨む大理石ラン。樓上碧照樓の額。樓下湖天浮玉の額。

元版 p819/現行版 p380

樓の額　中樓下、湖天浮玉の額
水に臨む大理石ラン　樓上碧照
壇先蠶壇の赤壁、
北海、藻、蓮、菖蒲、右に先農
す為か（中の氏説）戲台、
うて亭、階急　天子女を怕れさ
塔外、北海を見る、洞穴、中山に沿
神仙趣味

【「北京日記抄」五　名勝】〔永安寺〕、〔北海〕

【「北京日記抄」五　名勝】〔北海〕

碑

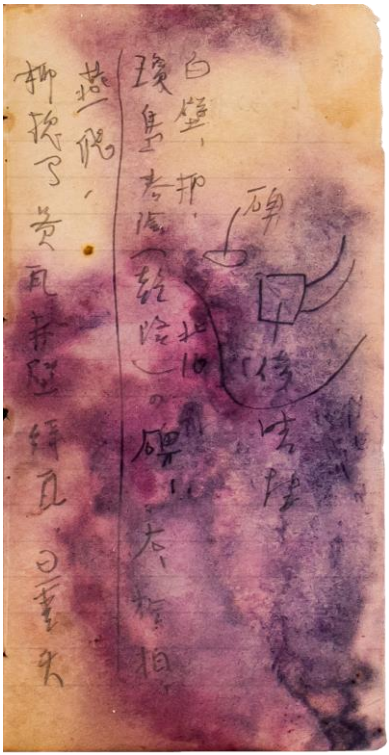
倚晴楼

白壁、柳、

瓊島春陰（乾隆）の碑、右、桧柏、

燕飛、

柳槐間　黄瓦赤壁緑瓦。曇天



33

柳槐間黄瓦赤壁緑瓦。曇天燕飛。〇瓊島春陰（乾隆）の碑。右、檜柏。白壁。柳。倚晴樓。

元版 p819/現行版 p380

34

○芦山動き出す。實は一輪車。
○天壇。大理石橋――橋下一面の芦。齋宮の1門――大理石橋――2門齋宮は赤壁、綠瓦。

元版 p819/現行版 p380

斉宮は赤壁、綠瓦
斉宮の1門――大理石橋――2門
天壇 大理石橋――橋下一面の芦、
芦山動き出す　実は一輪輪車。

【「北京日記抄」五　名勝】〔天壇〕

35

は金

槐の上宮はうす雲

云へぬ紺色なり。楡

年殿を見る　何とも

ノ門を出ると祈

門　槐の大木

時辰碑、

門

門

無梁殿

大理石の

古柏

碧瓦ノ

斉　戒　亭

銅人

鐵の手水

門

朱柱

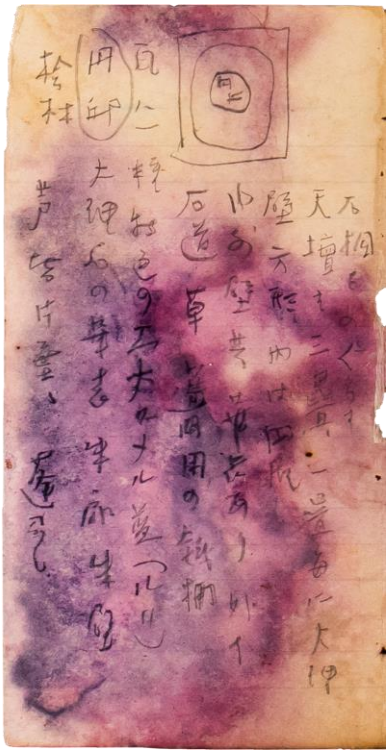
無梁

カベナシ

【「北京日記抄」五　名勝】〔天壇〕

門、槐の大木。1門を出ると祈年殿を見る。何とも云へぬ紺色なり。楡槐の上宮はうす雲。

元版 p819/現行版 p380



36

○圓邱。檜林。芦皆片葉。蓬多し。大理石の華表、朱扉朱壁。瓦ハ一種特色のエナメル藍（ルリ）。石道。草。□用の鐵柵。内外壁共華表あり。外は壁方形、内は圓形。天壇は三疊。一疊毎に大理石欄をめぐらす。

元版 p819/現行版 p380

石欄をめぐらす

円丘

天壇は三疊、一疊毎に大理

壁方形、内は円形

内外壁共華表あり 外は

石道　草　□中用の鐵桶

瓦　ハ一種特色のエナ中メル藍（ルリ）

円邱　大理石の華表　朱扉朱壁

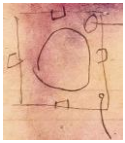
桧林　　芦皆片葉、蓬多し。

【「北京日記抄」五　名勝】〔天壇〕

燎炉

sacred

groundse



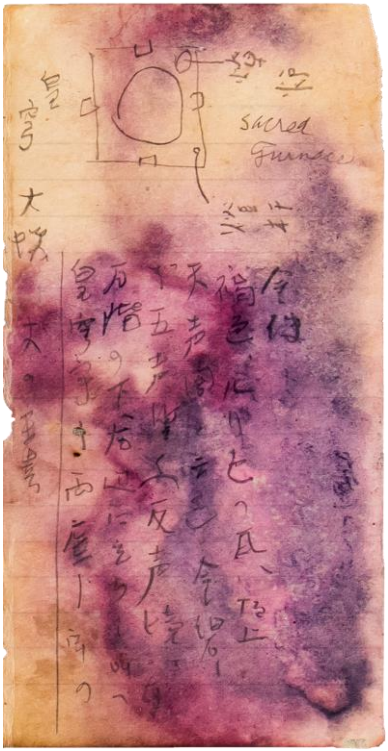
燈杆

金□

褐色、ルリ色の瓦、頂上天声閣と云ふ）金碧、ば五声響く（反声境、中石階の下、右辺に立ちて叫べ皇穹宇――両廡――宇の

皇穹

大蟻　犬の糞

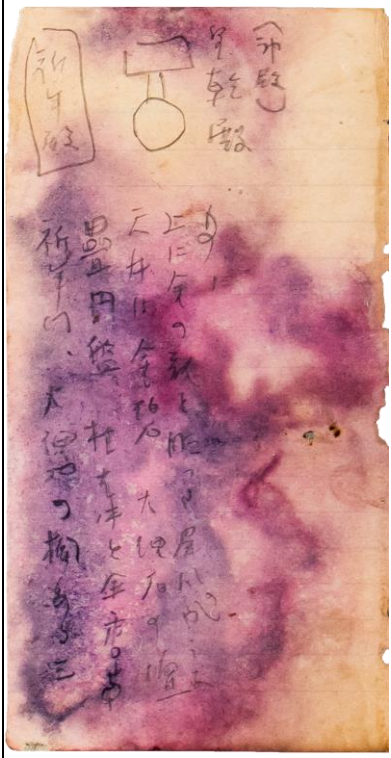


37

大蟻。犬の糞。

○皇穹宇――兩廡――宇の石階の下、右邊に立ちて叫べば五聲響く。（反聲境、天聲閣と云ふ）金碧。褐色。ルリ色の瓦。頂上金□。

元版 p819～820/現行版 p380～381



38

○祈年殿。祈年門。大理石の欄ある三疊圓盤。柱は朱と金唐草。天井は金碧。大理石の壇上に金の龍を彫つた屏風のやうなもの。

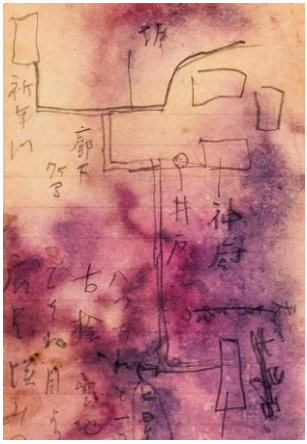
元版 p820/現行版 p381

（神殿）もの、の
皇乾殿
上に金の龍を彫つた屏風やうな
天井は金碧　大理石の壇
疊円盤　柱は朱と金唐草
祈年殿
祈年門、大理石の欄ある三

【「北京日記抄」五　名勝】〔天壇〕

39

塀



七星石

天中中つ

神厨

井戸

緑瓦井戸

宰牲亭

大釜四つ

七星石

廊下

75間

祈年門

八つあれど一つは数へず

古桧、空地ニ七星石

こはれ目より出づれば

廊は埃みつ　廊の

【「北京日記抄」五　名勝】〔天壇〕

○廊は埃みつ。廊のこはれ目より出づれば古檜。空地ニ七星石、八つあれど一つは數へず。

元版 p820/現行版 p381

ひるね多し。
声を試みる所、
死刑、をする所　役者が
天壇を出れば廣場

木椅子　五錢
藤椅子　十錢
入場料　五錢
城南公園

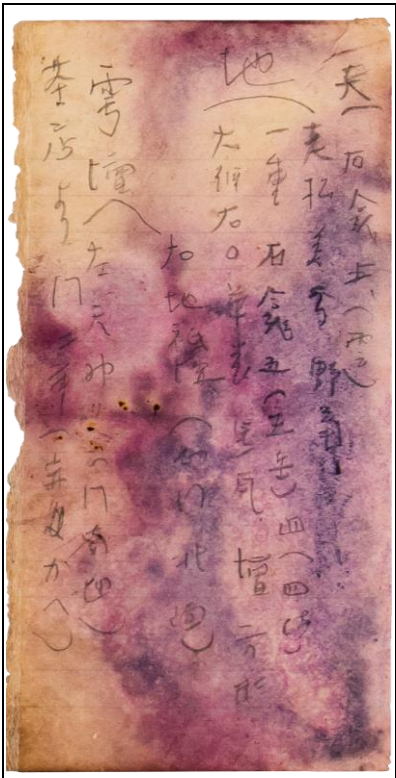
40

○天壇を出れば廣場。死刑をする所。役者が聲を試みる所。ひるね多し。
○城南公園。入場料五錢、藤椅子十錢、木椅子五錢。

【「北京日記抄」五　名勝】〔先農壇〕、〔天壇〕
【城南公園】先農壇の別名。

元版 p820/現行版 p381

天（石龕五、（雲）
老松美なり　野菊、
地
一重　石龕五（五岳）四（四海）
大理石の華表　黒瓦、壇　方形
雲壇
右　地祇壇（正門北面）
左　天神〃（正門南面）
茶店より　門二重（赤中かべ）



41

【「北京日記抄」五　名勝】〔先農壇〕

○茶店より門二重（赤かべ）。○雲壇。右、地祇壇（正門北面）左、天神壇（正門南面）。○地――大理石の華表、黒瓦、壇方形一重、石龕五（五岳）四（四海）老松美なり、野菊。○天――石龕五（雲）

元版 p820/現行版 p381

左に先農壇（方形）
支人テニスす
花木の間を出ればテニスコオト

耕を見るの所

眞
寫寫は校書のみ、天子　藉田親
理石欄。上に寫眞屋（バラツク）
中藉田、――親耕台（黄綠瓦、大

42

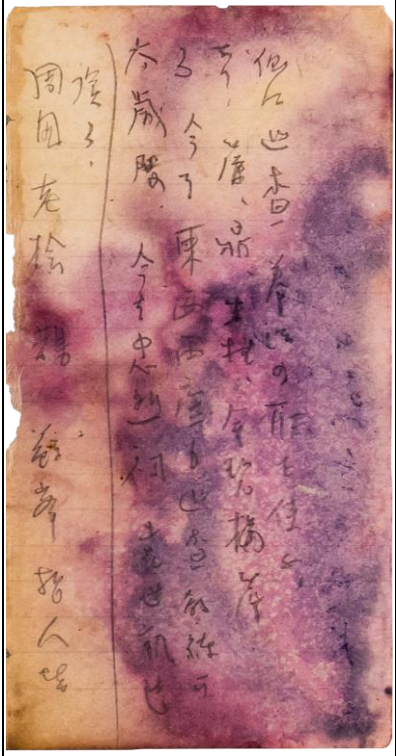
○藉田、――親耕臺。黄綠瓦。大理石欄。上に寫眞屋（バラツク）。寫眞は校書のみ。天子藉田親耕を見るの所。
○花木の間を出ればテニスコオト。支人テニスす。左に先農壇（方形）。

元版 p820/現行版 p381

【「北京日記抄」五　名勝】〔先農壇〕

側に巡査　拳法の形を使ふ。
なり、簾、鼎、朱柱、金碧[中]簷
る　今は東西両廡も巡査教練所
太歳殿。今は忠烈祠　袁世凱造

談る。
周囲　老桧　鵲　蘇峯　哲人皆



43

【「北京日記抄」五　名勝】〔先農壇〕

周圍老檜。鵲。蘇峰哲人皆談る。
○大歳殿。今は忠烈祠。袁世凱造る。今は東西
兩廡も巡査教練所なり。簾。鼎。朱柱。金碧簷。
側に巡査拳法の形を使ふ。

元版 p820/現行版 p381

44

○陶然亭。古刹慈悲淨林。黒煉瓦の門。大楡。石だたみ。門中江藻の陶然の額。門聯、門外時聞長者東、壺中別有仙家日。

元版 p820/現行版 p381

陶然亭

壺中別有仙家日
門外時聞長者車　門聯

門中江藻の陶然の額。
大楡、石だたみ。

古刹慈悲禅林　黒煉瓦の門

【「北京日記抄」五　名勝】〔陶然亭〕

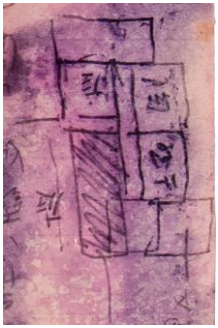
【古刹慈悲禅林】本手帳を参考に書かれた「北京日記抄」の入稿原稿（国立国会図書館蔵）には「古刹慈悲淨林」としているが、正しくは「禅林」である。「淨」の偏は「氵」よりも「礻」に見え、そのせいで「北京日記抄」を執筆した時に芥川自身も混乱したか。

【門外時聞長者車】唐・王縉「與盧員外象過崔處士興宗林亭」中の一句。

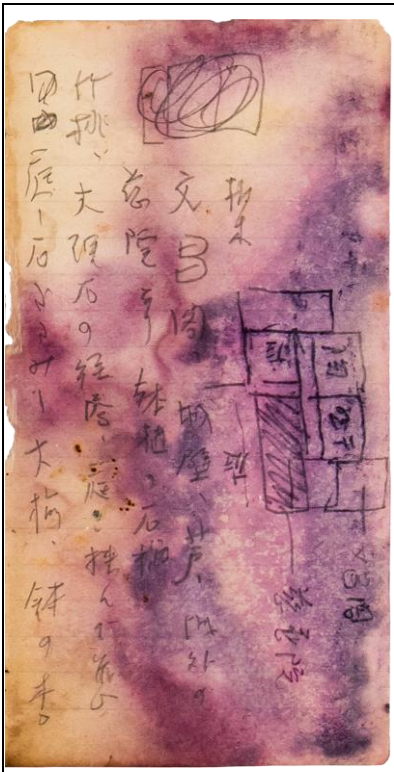
【壺中別有仙家日】唐・李商隱「題道静院院在中條山、故王顔中丞所置、虢州刺史捨官居此、今写真存焉」中の一句。

【「北京日記抄」五　名勝】〔陶然亭〕

陶　然亭



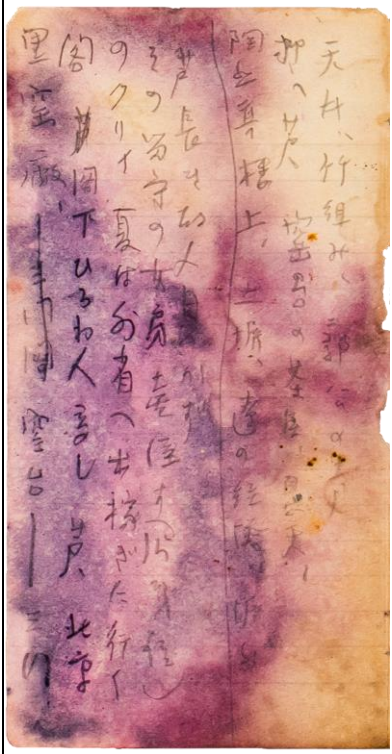
樹木
文昌閣、城壁、芦、城外の慈院なり　鉢植の石榴
竹桃、大理石の経塔、庭を挟んで悲門内庭―石だたみ―大楡、　鉢の杏



45

○庭――石だたみ――大楡。鉢の杏竹桃。大理石の經塔。庭を挟んで慈悲院あり。鉢植の石榴。文昌閣。城壁。芦。城外の樹木。

元版 p820/現行版 p382



46

○黒窑廠。窑臺。――三門閣。閣下ひるね人多し。芦。北京のクリイ夏は外省へ出稼ぎに行く。その留守の女房賣淫す（15錢位）。芦長き故人目つかず。
○陶然亭樓上。土塀。遼の經塔。塀外柳。芦。窑臺の茶屋。夏天。天井。竹組み。郭公の聲。

元版 p821/現行版 p382

天井、竹組み、郭公の声
柳、芦、　窑台の茶屋、夏天、
陶然亭楼上、土塀、遼の経塔、塀外

芦長き故人目つかず
その留守の女房賣淫す（15 戔位）
のクリイ　夏は外省へ出稼ぎに行く
閣　芦閣下ひるね人多し　芦、北京
黒窑廠、□三門閣　窑台――三門

【「北京日記抄」五　名勝】〔窑台〕、〔陶然亭〕

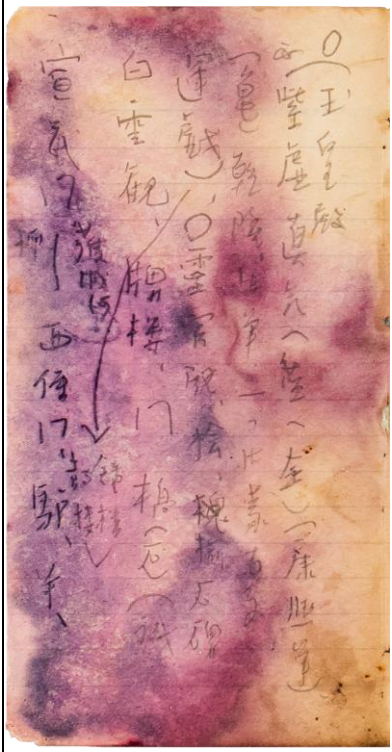
子、
窓は麻（青）張り、節様の卍障

47

【「北京日記抄」五　名勝】〔陶然亭〕

窓は麻（青）張り。蔀様の卍障子。

元版 p821/現行版 p382



○玉皇殿
□紫虛眞気（藍へ金）（康熙筆）
（亀）乾隆、御筆　一つは蒙古文、
運戲）、○靈官殿、桧、槐榆石碑
白雲観、牌楼、門　橋（石）（識
鐘楼
宣武門　護城河　鼓楼
柳　西便門、駅、羊、

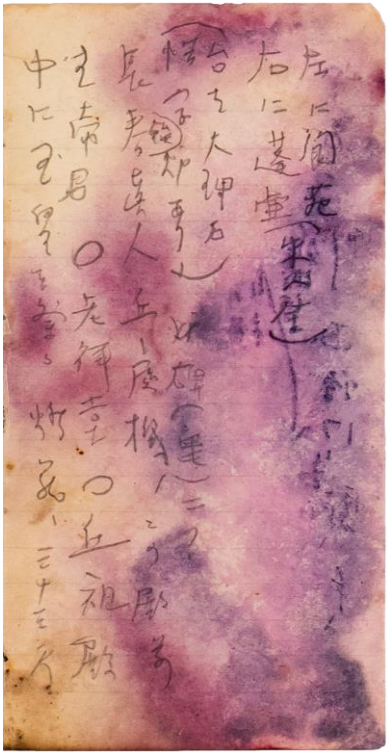
48

○宣武門。護城河。柳。西使門。驢。羊。○白雲觀。牌樓。門。橋（石）。鐘樓。鼓樓。（識運戲）○靈宮殿。檜。榆。石牌（龜）、乾隆御筆。一つは蒙古文。○玉皇殿。紫虛眞氣、（藍へ金）（康熙筆）

元版 p821/現行版 p382

【「北京日記抄」五　名勝】（白雲観）

左に閬苑　（朱へ金）
右に蓬壺
（台は大理石
惜字炉あり、）　炉碑（亀）二つ、
長春眞人丘處機、この殿前
主帝君　○老律堂　○丘祖殿
中に玉皇を祭る　燈籠、三十三天

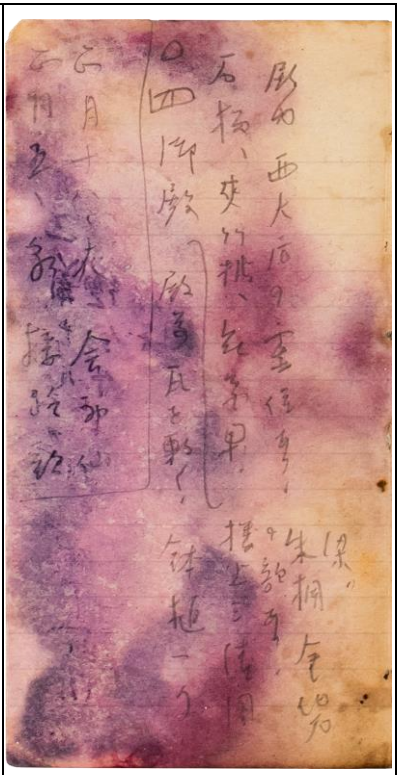


49

【「北京日記抄」五　名勝】（白雲観）

中に玉皇を祭る。燈籠。三十三天主帝君。○老律堂。○丘祖殿。長春眞人丘處機。この殿前（惜字爐あり臺は大理石）碑（龜）二つ。右に蓬壺。左に閬苑（朱へ金）。

元版 p821/現行版 p382



50

梁。
朱欄　金碧
の額あり。
楼上三清閣
鉢植一つ

殿内　西大后の霊位あり、
石榴、夾竹桃、無花果。
○四御殿　殿前瓦を敷く、

正月十八、□　会神仙
正月五、　□　接路頭

○四御殿。楼上三清閣の額あり。朱欄金碧梁。殿前瓦を敷く。鉢植一つ。石榴。夾竹桃。無花果。殿内西太后の霊位あり。

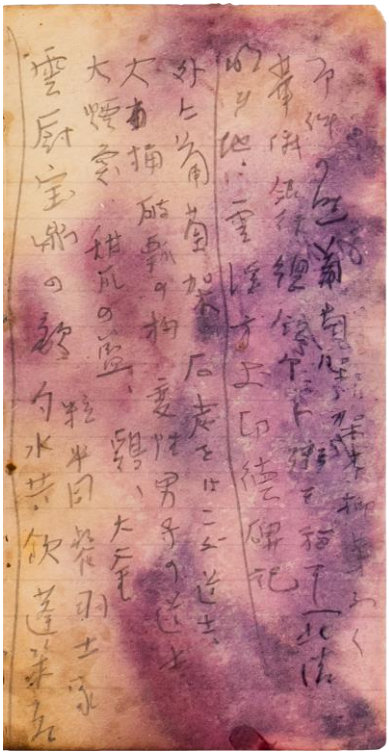
元版 p821/現行版 p382

【「北京日記抄」五　名勝】〔白雲観〕

【接路頭】中野江漢『支那の売笑』（支那風物研究会、一九二三・一二）によると、「接路頭」は「正月五日の早天に室外に出て神に会ふ」迷信であるという。「会神仙」とともに中野から聞いたものか。

事件の時）葡萄架　架□　柳芽ふく
華俄銀行總領事ト粥を施す（北清
明き地。雲渓方丈功德碑記

外に葡萄架　石炭をはこぶ道士、
大□桶　破瓢の杓　変性男子の道士、
大煙突　甜瓜の籃、鶏、大釜
雲厨宝鼎の額　粒米同餐羽士家
勺水共飲蓬莱客



51

【「北京日記抄」五　名勝】〔白雲観〕

○雲厨寶鼎の額。「勺水共飲蓬莱客、粒米同餐羽士家。」大煙突。甜瓜の籃。鶏。大釜。大桶。破瓢の杓。變性男子の道士。外に葡萄架。石炭をはこぶ道士。
○明き地。雲渓方丈印德碑記。華俄銀行總領事ト粥を施す。（北清事件の時）葡萄架。架李。柳芽ふく。

元版 p821/現行版 p382

岳雲聳秀、の石　蔦掩ふ

南極殿、眞武殿

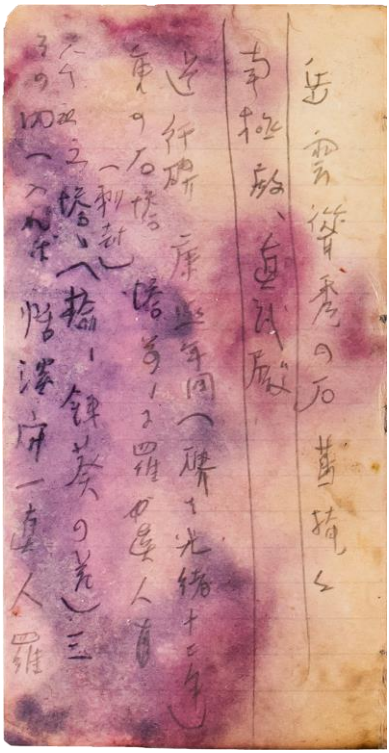
道行碑　康熙年間（碑は光緒十二年）

重の石塔　塔前ノに羅□眞人□

（刺封）

公□之塔、（楡、錢葵の花）三

その内へ入れば　恬淡守一眞人羅



52

○その内へ入れば、恬淡守一眞人羅公之塔。（刺封）（楡、錢葵の花）三重の石塔。塔前に羅眞人道行碑、康熙年間（碑は光緒十二年）。

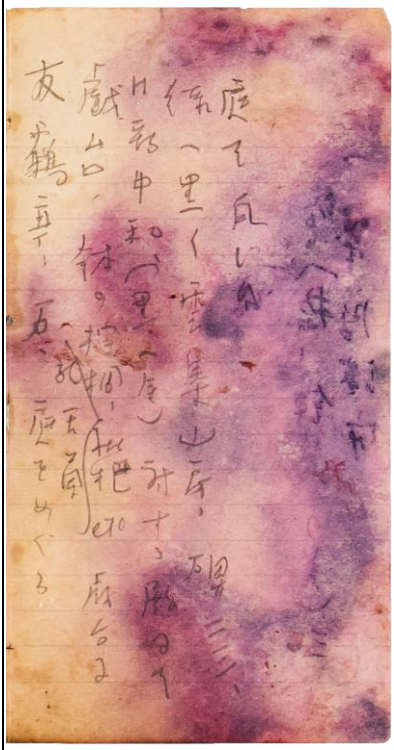
○南極殿。眞武殿。○岳雲聳秀の石蔦掩ふ。

【「北京日記抄」五　名勝】〔白雲観〕

【刺封】正確には「勅封」。

元版 p821/現行版 p382～383

庭は瓦じき
緑へ黒く雲集山房、碑二三、
は致中和、（黒へ金）　対する殿には
戲台、鉢の棕櫚、枇杷　etc　戲台に
龍舌蘭
友鶴亭、石、庭をめぐる

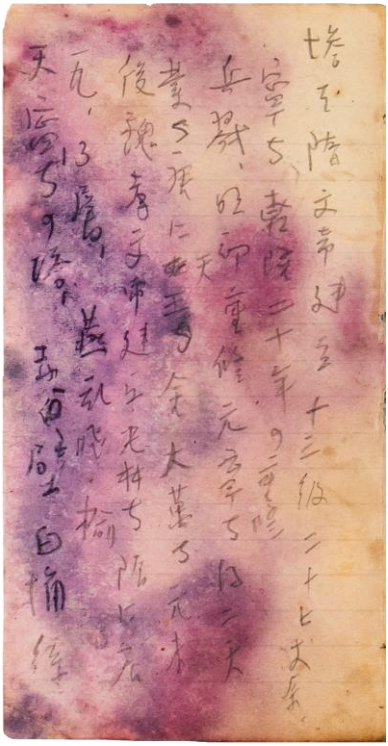


53

【「北京日記抄」五　名勝】〔白雲観〕

○友鶴亭。石。庭をめぐる戲臺。鉢の棕櫚。龍舌蘭。枇杷etc. 戲臺には□中和（黒へ金）。對する殿には緑へ黒く雲集山房。碑二三。庭は瓦じき。

元版 p822/現行版 p383



54

○天寧寺の塔。赤壁。白桶。緑瓦。十三層。燕亂飛。楡。○後魏孝文帝建立、光林寺。隋に宏業寺。唐に天王寺。金、大萬寺。元、未兵戮。明初重修、元寧寺。後ニ天寧寺。乾隆二十年の重修。○塔は隋文帝建立十三級、二十七丈餘。

元版 p822/現行版 p383

塔は隋文帝建立十三級二十七丈余。
寧寺　乾隆二十年の重修
兵戮、明初重修　元寧寺　後ニ天
天
業寺唐に□王寺　金　大萬寺　元未
後魏孝文帝建立　光林寺　隋に宏
瓦、13層、燕乱飛　楡
天寧寺の塔、赤〜〜壁　白桶　緑

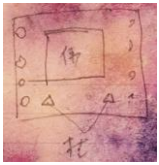
【「北京日記抄」五　名勝】〔天寧寺〕

【白桶】前掲「北京日記抄」の入稿原稿では「桶は白く」と書かれた後、「屋椽は白く」と訂正されている。白い屋椽を意図する「白檐」を意図したものか。

【乾隆二十年の重修】「乾隆二十一年」の誤り。「後魏孝文帝建立」から次の頁にわたり、芥川旧蔵（日本近代文学館蔵）丸山昏迷著『北京』（一九二一・三）における「天寧寺」の説明とほぼ一致している。なお、『北京』の中で「大萬寺」とされた「天寧寺」の旧称は、正確には「大萬安寺」か「大萬安禅寺」である。

【「北京日記抄」五　名勝】〔天寧寺〕

承前



井半なし。

十七年（大理石の蓮台）天

頭瓦をおく、大明□弘治

佛

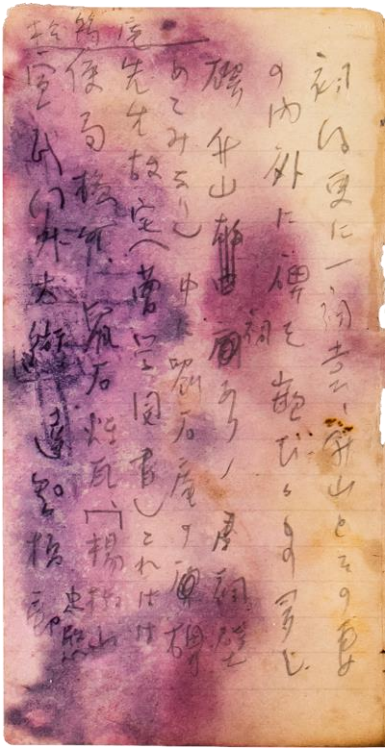
華台、字彫の壁　塔前廃寺、佛

三千四百余の鐸鈴、下は蓮

55

三千四百餘の鐸鈴。下は蓮華臺。佛字彫の壁。塔前廢寺。佛頭瓦をおく。大明弘治十七年（大理石の蓮臺）。天井半なし。

元版 p822/現行版 p383



祠後更に一祠堂、升山とその妻の内外に碑を嵌むるもの多し。

□　升山故□　祠廟あり／□祠壁めこみなり）　中に劉石庵の碑碑

松筠庵

先生故宅（曹学閔書）これはは便局横町。鼠石炼瓦、［楊椒山忠愍

宣武門外大街、達智橋郵

56

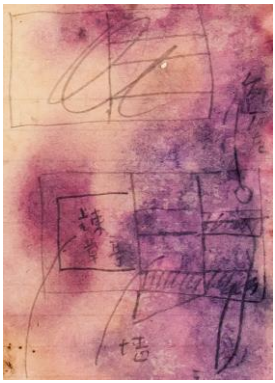
○松筠庵。宣武門外大街。達智橋郵便局横町。鼠石煉瓦。楊椒山（忠愍）先生故宅。（曹學閔書）これははめこみなり。中に劉石庵の碑。礫升山祠あり。祠壁の内外に碑を嵌むるもの多し。祠後更に一祠堂。升山とその妻

元版 p822/現行版 p383

【「北京日記抄」五　名勝】〔松筠庵〕

【「北京日記抄」五　名勝】〔松筠庵〕

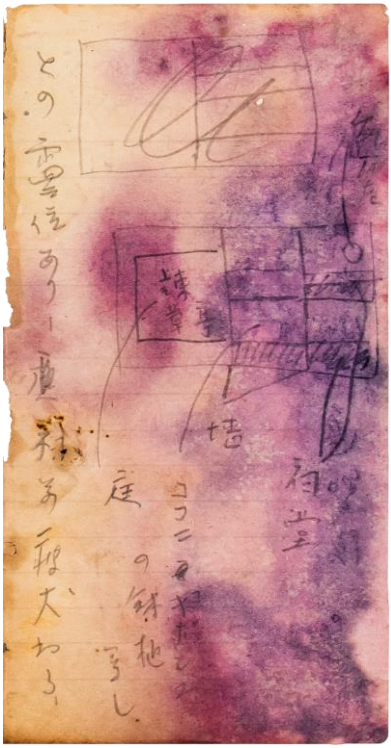
劉石庵



ココニ□ギボシユ
の鉢植
多し。

との靈位あり、庭祠前瘦犬ねる。

57



との靈位あり。祠前瘦犬ねる。○諫草亭。ココニギボシユの鉢植多し。

元版 p822/現行版 p383

58

○庭は瓦、岩をつむ。柳、松、蔦、檜、蘭。椒山の「鐵肩擔道義、辣手著文章」の碑ランプの臺となる。（廊下）フシン中。入口に君子自重の小便壺。職人往來多し。祠は法源寺後街北第二號。

元版 p822/現行版 p383

祠は法源寺後□街北第二号。

壺、職人往来多し

フシン中、入口に君子自重の小便

の碑ランプの台となる（廊下）

椒山の「鐵肩擔道義　辣手著文章」

庭は瓦、岩をつむ　柳、松、蔦　柳柳　桧　蘭

【「北京日記抄」五　名勝】〔松筠庵〕、〔謝文節公祠〕

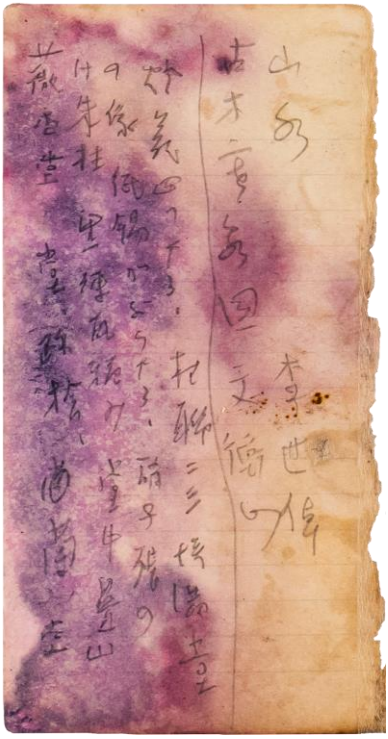
ぐれば庭なり。庭中央、天水壷
女一人　婆一人　縫物をしてゐる所をす
その右の壁に刻字石をはめし壁、
緑色の扉にこの札かかる
外右四区警察署第一半日学校
の門
謝文節公祠（黒金へ金）黒煉瓦

59

【「北京日記抄」五　名勝】〔謝文節公祠〕

○謝文節公祠。（黒へ金）黒煉瓦の門。外右四區警察署第一半日學校。緑色の扉にこの札かかる。その右の壁に刻字石をはめし壁。女一人婆一人縫物をしてゐる所をすぐれば庭なり。庭中央。天水壷。

元版 p822/現行版 p383



60

○薇香堂。堂。疎檜。蘭。堂は朱柱、黒煉瓦積み。堂中疊山の像。紙錫がぶらさがる。硝子張の燈籠四つ下る。柱聯二三。埃滿堂。
○古木寒泉圖、文衡山。山水、李世偉。

元版 p822/現行版 p383

山水　李世偉
古木寒泉図　文衡山

燈籠四つ下る。柱聯二三　埃滿堂の像　紙錫がぶら下る、硝子張のは朱柱　黒煉瓦積み　堂中疊山薇香堂　堂、疎桧、蘭、堂

【「北京日記抄」五　名勝】〔謝文節公祠〕、〔紫禁城（文華殿の東配殿本仁殿か）〕
【薇香堂】正確には「薇馨堂」。
【古木寒泉図】以降記された書画の一部は前掲丸山昏迷『北京』に再録された、栗原誠「文華殿読画記」（初出：『支那美術研究叢書　第一編　文華殿古画目録・文華殿読画記』、一九一九・一〇）で概要が確認できる。

煙江疊嶂図　王原祈□
墨竹　張　詭　□
万□壑松風　文伯仁　明
大乙観泉、　王　蒙

本仁殿
震沢烟樹　唐　寅　明
□山水　雛一柱　清

61

【「北京日記抄」五　名勝】〔紫禁城（文華殿の東配殿本仁殿）〕、〔紫禁城（文華殿か）〕
【雛一柱】前掲「文華殿読画記」によると「鄒一桂」。

山水、雛一柱（清）。震澤烟樹、唐寅（明）。本仁殿。
○大乙觀泉、王蒙。萬壑松風、文伯仁（明）。墨竹、張詭（明）。煙江疊嶂圖、王原祈。

元版 p822～823/現行版 p383～384

仇英　趙子昂、
沈周　藍瑛偽筆
芙蓉秋鴨図　王維烈（明）
ノ木の色つよすぎる
桐陰玩鶴図（石田）
職貢図　立本（偽）

62

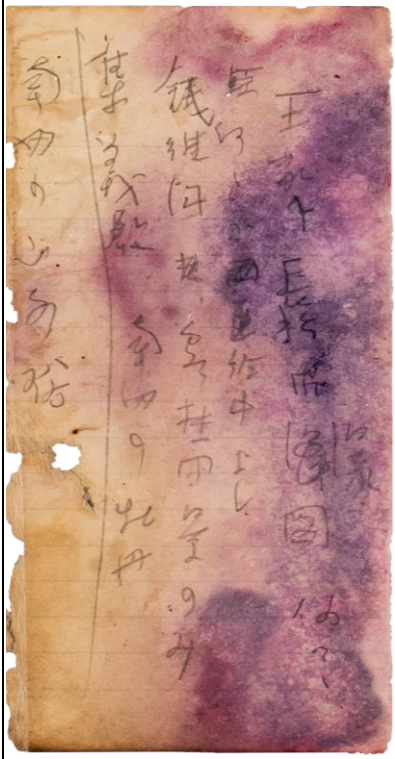
職青圖、立本（僧）。桐陰玩鶴圖（石田）ノ木の色つよすぎる。芙蓉秋鴨圖、王維烈（明）。沈周藍瑛僞筆。仇英趙子昂。

元版 p823/現行版 p384

【「北京日記抄」五　名勝】〔紫禁城（文華殿か）〕

王蒙 ㇀ 長松飛中図 偽？ 瀑
臣何とか中中絵中 よし。
錢維城 中 泉林雨景のみ
集義殿、南田の牡丹

南田の山水 俗



63

【「北京日記抄」五 名勝】〔紫禁城（文華殿か）〕、
〔紫禁城（文華殿の西配殿集義殿）〕

南田の山水、俗。
○集義殿、南田の牡丹。錢維城、泉林雨景のみ。
臣何とか繪中よし。王蒙――長松飛瀑圖、偽？

元版 p823/現行版 p384

64

煉瓦、天井穹窿、天井頂は
雕梁、堂は石階の上、浴室は白
鉢の柘榴

浴德堂（藍へ金）
黄瓦、赤柱、白大理石台の上に銅炉
浴德堂。煥章殿中の奥、

李公麟、十六応眞、俗

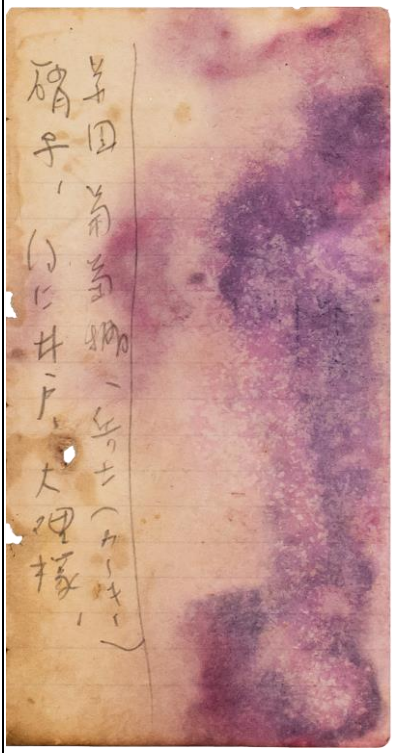
李公麟、十六應眞、俗。
○浴德堂。煥章殿の奥。黄瓦。赤柱。白大理石。臺の上に銅爐。鉢の柘榴。浴德堂（藍へ金）。雕梁。堂は石階の上。浴室は白煉瓦。天井穹窿。天井頂は

元版 p823/現行版 p384

【「北京日記抄」五　名勝】〔紫禁城（文華殿の西配殿集義殿か）〕、〔紫禁城（武英殿の西北にある浴德堂）〕

前掲丸山昏迷『北京』によると、当時の紫禁城では文華殿・武英殿のみが書画やその他の美術品を展示する古物陳列所として公開され、一般観覧が可能であった。また、武英殿の西北に位置する浴德堂も決まった日に公開されていた。

花園　葡萄棚、兵士（カーキ）
硝子、後に井戸、大理椽、

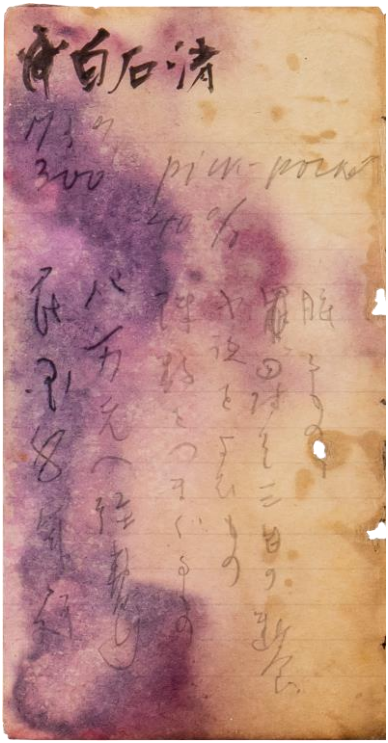


65

【「北京日記抄」五　名勝】〔紫禁城（武英殿西北の浴德堂）〕

硝子。後に井戸。大理椽。花園。葡萄棚。兵士（カーキ）。

元版 p823/現行版 p384



66

○民國八年建。八萬元（經費）。759—300. Pick-pocket (40%) 罰は三日の斷食。數珠をつまぐるもの、小説をよむもの、眠るもの。

元版 p823/現行版 p384

中白石清

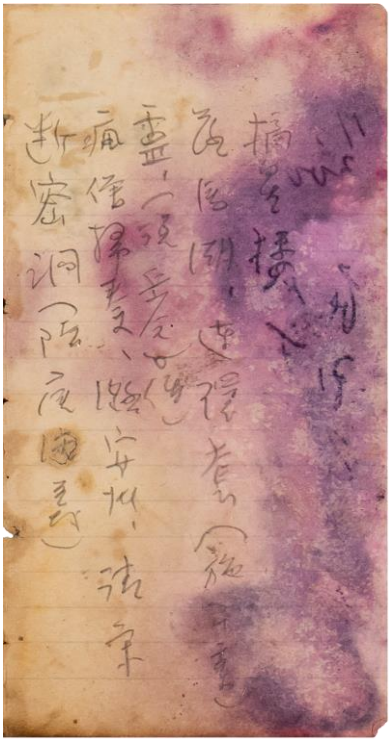
759/
300 pick-pocket
40%

眠るもの
罰は三日の断食
小説をよむもの
珠数をつまぐるもの
八万元（経費）
民国8年建

【「雑信一束」十五　監獄】〔京師第二監獄〕

前掲「北京日記抄」の入稿原稿（「北京日記抄　一」）の二七枚目に、七行目から八行目にかけて「紫禁城」について書かれ、九行目には文字がなく、十行目に「京師第二監獄を見る。日本語に堪能なる看」と書かれている。のち、九行目と十行目は波線によって抹消された（九行目には棒線も引かれていた）。本来は本手帳に記されたメモと同様に、「北京日記抄」において「紫禁城」の次に、「京師第二監獄」を単独の節として執筆する予定だったか。

摘星楼、
落馬湖、連環套（施公案）
靈、（説岳全~~伝~~傳）
瘋僧掃秦、潞安州、請宋
断密潤（隋唐演義）



67?

すべて中国劇の演目。

○斷密洞（隋唐演義）。瘋僧掃秦。潞安州。清宋靈。（說岳金傳）落馬湖。連環套（施公案）。摘星樓。

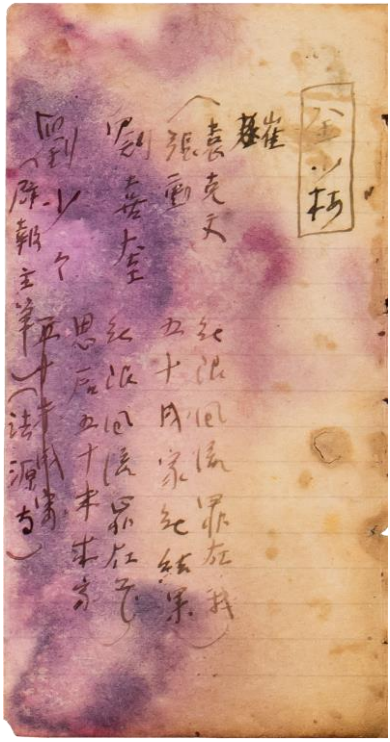
元版 p823/現行版 p384

金少梅

中崔

袁克文　無限風流罪在我
張勲　五十成家無結果
劉喜奎　無限風流罪在花
劉少々　思君五十未□家
五十未成家

（辟報主筆）（法源寺）

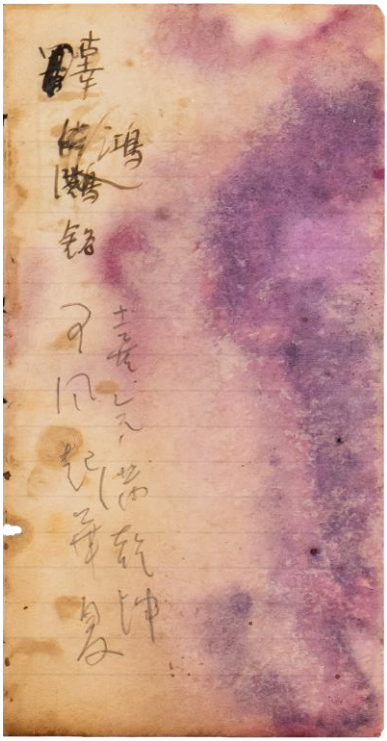


68?

○劉少々。（□報主筆）（法源寺）「思君五十未成家、無限風流罪在花。」劉喜奎。「五十成家無結果、無限風流罪在我。」張勲。袁克文。金少梅。

元版 p823/現行版 p384

【劉喜奎】民国初期に活躍した劇壇女優。劉少々（記者・評論家）、張勲（軍人・政治家）、袁克文（袁世凱の次男で学者）の三人はいずれも彼女に懸想していたと言われている。



73?

中 辜

中 鴻

中 銘

喜気満乾坤、

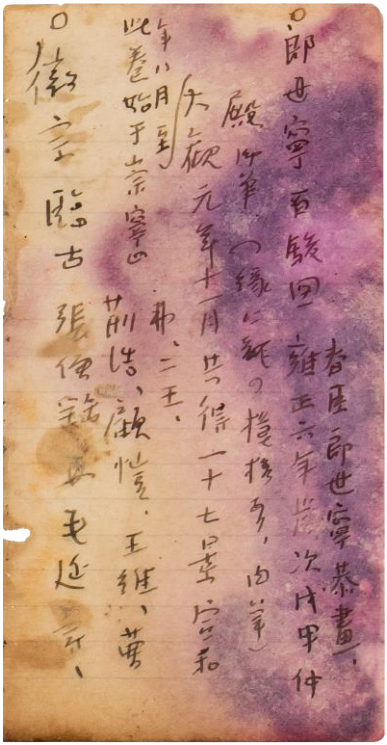
王風起華夏

元版 p823/現行版 p384

○辜鴻銘。王風起華夏、喜氣滿乾坤。

【「北京日記抄」二　辜鴻銘先生】

○郎世寧百駿図　　春臣郎世寧恭畫。
　　雍正六年歳次戊申仲
　　殿　御筆。（縁に龍の模様あり、肉筆）
　　大観元年十一月　共得一十七景宣和
年八月至
此巻始于崇寧四　　弗、二王、
　　荆浩、顧愷、王維、曹
○徽宗臨古　　張僧□　中　毛延壽、



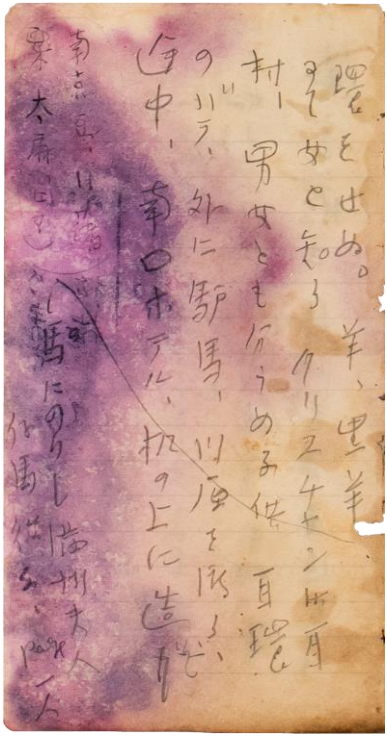
75

〔西城霊境井児胡同　陳宝琛宅〕
二点とも珍品。清末重臣であり、溥儀の師匠でもある陳宝琛宅で、芥川がこれらの名画を目にしたことは、犬養健に宛てた書簡（一九二五・七・一七）で窺える。また、陳宝琛の住所は前掲『図版2』に収録された「澄江堂遺珠ノート1」の三四枚目に記されている。〔参考：秦剛「芥川龍之介が観た　1921年・郷愁の北京」（『人民中国』、二〇〇七・九）、同「陳宝琛の書が語る、芥川と故宮名画の一期一会」（『日本近代文学館』二九二号、二〇一九・一一・一五）〕
【張僧□】南朝・張僧繇。
【顧愷】南朝・顧愷之。

○徽宗臨古張僧繇。毛延壽、荆浩、顧愷、王維、曹弗、二王。此巻始于崇寧四年八月至大観元年十一月共得一十七景宣和殿御筆。（縁に龍の模様あり、肉筆）
○郎世寧百駿圖。雍正六年歳次戊申仲春臣郎世寧恭畫。

元版 p823/現行版 p384

環をせぬ。羊、黒羊
にて女と知る　クリスチヤンは耳
村、男女とも分らめ子供　耳環
のバラ、外に駅馬、川原を渡る、
途中、南口ホテル、机の上に造中花
南京豆、甘藷
栗　太麻　ヒマ
馬にのりし満洲夫人
仔馬従ふ、page　一人



76

〔十三陵〕

○途中。南口ホテル。机の上に造花のバラ。外に驢馬。川原を渡る。村。男女とも分らぬ子供耳環にて女と知る。クリスチヤンは耳環をせぬ。羊。黒羊。馬にのりし滿洲夫人。仔馬従ふ。page　一人。

元版 p824/現行版 p385

埃の臭、蝙蝠の糞　屋上草長ず
秣陵殿前古松摧　殿中駈馬三頭

白光ある雲山端にあり、
く、子供多し、轎休む、曇天、
二匹土にころがる、柳　幹より芽をふ
こる。端方の碑あり、赤壁の家。駈
石牌楼、大理石、　丹碧かすかにの

77

〔十三陵〕

○石牌楼。大理石。丹碧かすかにのこる。端方の碑あり。赤壁の家。驢二匹土にころがる。柳幹より芽をふく。子供多し。轎休む。曇天。白光ある雲山端にあり。
○秣陵殿前古松摧。殿中驢馬三頭。埃の臭。蝙蝠の糞。屋上草長ず。

元版 p824/現行版 p385

を半かくす（象にのれる人）、支那同行二人
居庸関　民家の土壁　石ノアアチの浮彫
五轎を下り川を渡る　路は石　磊々

燕と
燕ぢ無数、
帝之陵は紅斑大理石の碑
陵のトンネル、漆喰をぬる、成祖文皇
陵前　カシワ、多し　松、桧、もあり

78

○陵前カシハ多し。松、檜もあり。陵のトンネル、漆喰をぬる。成祖父皇帝之陵は紅斑大理石の碑。燕とぶ無數。
○轎を下り川を渡る。路は石磊々。居庸關。民家の土壁。石のアアチの浮彫を半かくす（象にのれる人）。支那同行二人。

〔十三陵〕
【「雑信一束」十六　万里の長城】〔居庸関〕

元版 p824/現行版 p385

grey
&
brown

wall は grey □ 瓦かけ狼藉

ノ花。花なきヒアフギ　燕、山は green &

荷もち、中バツタ、虫声、松葉百合

門に「居庸外関」の字あり、子供の

栗鼠　蜥蜴。「勿請勿拗折」の札、

琴峡　藻の花あり、岩上に廟、

五柱頭山洞、（隧道）の右に弾

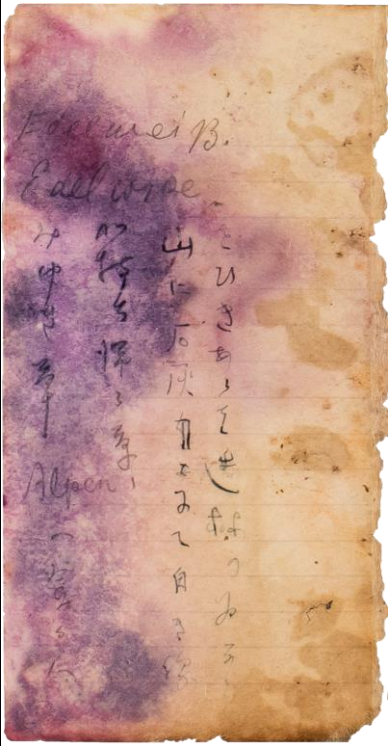
79

【「雑信一束」十六　万里の長城】〔弾琴峡〕

【五柱頭山洞】正確には「五桂頭山洞」。

○五柱頭山洞（墜道）の右に弾琴峡。藻の花あり。岩上に廟。栗鼠。蜥蜴。「請勿拗折」の札。門に「居庸外關」の字あり。子供の荷もち。バツタ。虫聲。松葉。百合ノ花。花なきヒアフギ。燕。山は green and brown. wall は grey. 瓦かけ狼藉。

元版 p824/現行版 p385



をひきあるは造林の為なり
山に石灰中□にて白き線
が持ち帰る草、
みゆき草　Alpen へ登る人

Edelweiß.
Edelwise.

80

○Edelweisz (Edelwise) みゆき草。Alpen へ登る人が持ち歸る草。○山に石灰にて白き線をひきあるは造林の爲なり。

【「雑信一束」十六　万里の長城】
【Edelweiß】ドイツ語。エーデルワイス。キク科ウスユキソウ属の高山植物。
【Edelwise】英語「Edelweiss」の誤りか。

元版 p824/現行版 p385

81

Co□

Co

Codoa□

Codd［約一行不明］

Codda［約一行不明］

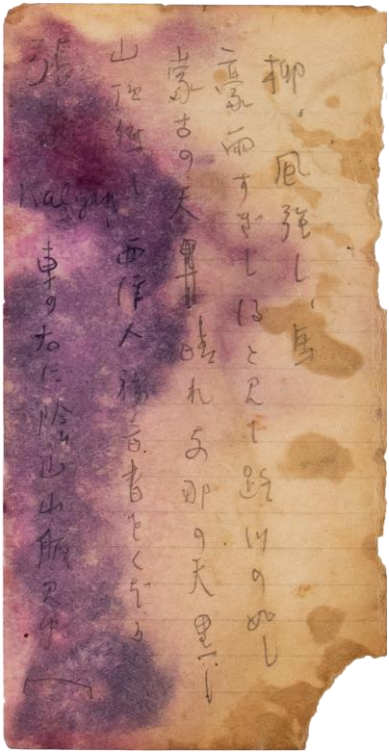
Codda□dro□

Cods

Condan［約一行不明］

全集未収録

ドイツ語の筆記体か。



82

○張家Kalgan.　車の右に陰山山脈見ゆ。山頂低し。西洋人福音書をくばる。蒙古の天晴れ、支那の天黒し。豪雨すぎし後と見えて路川の如し。柳。風強し。馬。

元版 p824/現行版 p385

柳、風強し、馬

豪雨すぎし後と見て路川の如し

蒙古の天~~黒し~~晴れ支那の天黒し

山頂低し　西洋人福音書をくばる

張家Kalgan、車の右に陰山山脈見ゆ

〔張家口〕

満目泥色　天の河斑々　南京虫　蚊なし

ぶ、星明朗　東花桟、瓦の床、

ワンセンション）英日語ニ通ズト云フ　鳩と

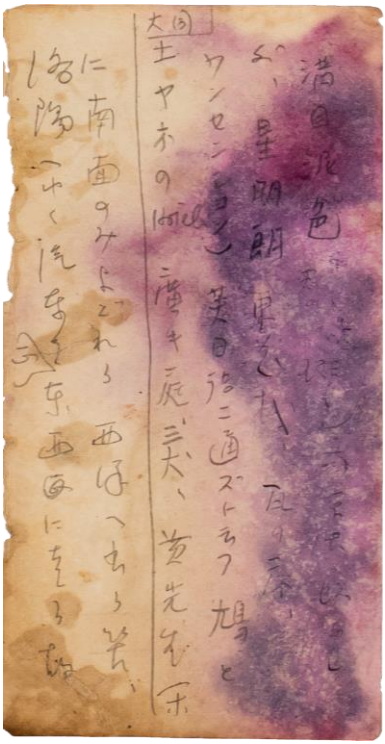
大同

土ヤネの Hotel.　廣キ庭、三犬、黄先生（ホ

に南面のみよごれる　西洋へ出る筈、

洛陽へゆく汽車は东西正に走る故

正



83

〔大同〕

○洛陽へゆく汽車は正東西に走る故に南面のみよごれる。西洋へ出る筈。

○大同。土ヤネの Hotel. 廣キ庭。三犬。黄先生（ホワンセンション）、英日語ニ通ズト云フ。鳩とぶ。満目泥色。星明朗。天の河斑々。東花桟。瓦の床。南京虫。蚊なし。

元版 p824～825/現行版 p385

門前の石獅上をむく。

雲崗堡

門前　傾面大樹アリ　ヤン~~ナ~~シユナリト云フ
楊　樹

台頭　念佛　（右）　（左）（門は鼠色レンカ）

タンポ　所々の神道碑、植樹、~~ノヤト~~

ゲ風の花、馬糞ニ甲虫ムラガル、稀ニ

土、石、grey、　草疎、水~~中~~稀、ゲ~~ケ~~ン

香草（シヤンツアオ）

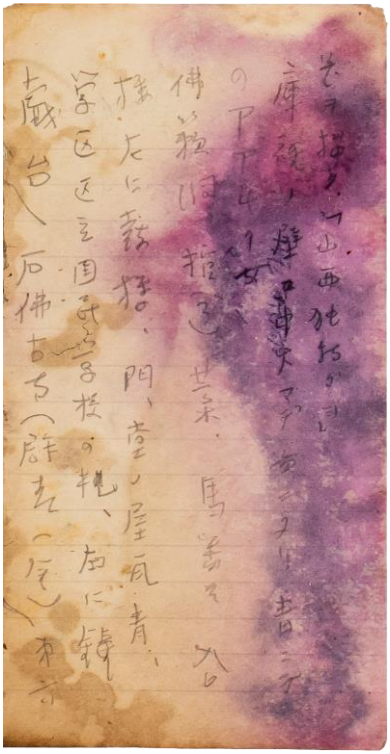
84

○土。石。grey. 草疎。水稀。ゲンゲ風の花――香草（シヤンツアオ）。馬糞ニ甲虫ムラガル。稀ニタンポポ。所々の神道碑。植樹。○臺頭（右）、念佛（左）（門は鼠色レンガ）。門前傾面大樹アリ。楊柳（ヤンシユ）ナリト云フ。門前の石獅上をむく。雲崗堡

〔大同〕

元版 p825/現行版 p385～386

花ヲ描ク。「山西独特ダヨ」
庫裡ノ壁 中中央マデ黄ニヌリ 青ニテ
のアアチノ女
佛籟洞 棺（3）藁。馬糞 入口
楼 左に鼓楼、門、堂ノ屋瓦青、
学区区立国民学校の札、右に鐘
戯台 石佛古寺（群青へ金） 第六

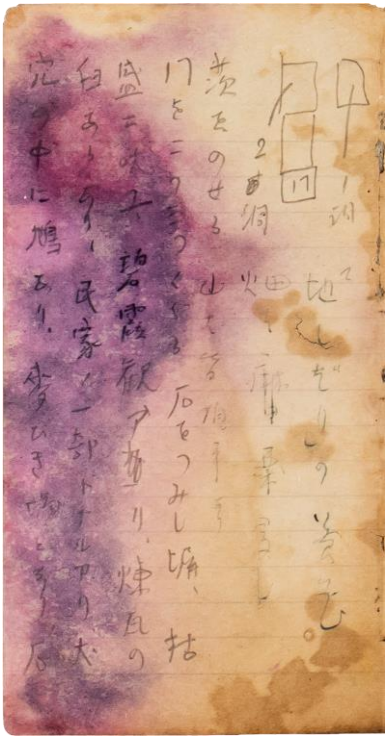


85

【「雑信一束」十七 石仏寺】〔大同石仏寺（雲崗石窟）〕

○戯臺。石佛古寺、（群青へ金）第六學區區立國民學校の札。右に鐘樓、左に鼓樓。門。堂ノ屋瓦青。佛籟洞。棺（3）。藁。馬糞。入口のアアチの女。庫裡ノ壁中央マデ黄ニヌリ青ニテ花ヲ描ク。「山西獨特ダヨ」

元版 p825/現行版 p386



86

1洞

門　「地しばり」の黄花

2□洞　畑は麻□粟多し

茨をのせる　山は皆頂平なり

門を二つ三つくぐる　石をつみし塀、枯

盛ニ吠ユ、碧霞観、ア木十リ、煉瓦の

臼あるあり、民家ノ一部トナルアリ。犬

穴の中に鳩あり。麥ひき場となり、石

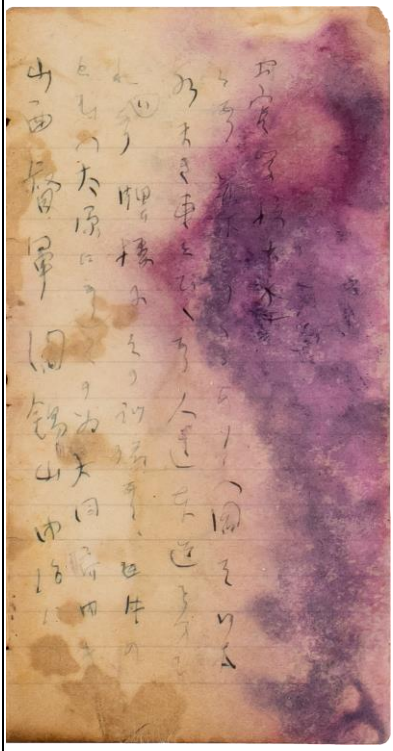
○穴の中に鳩あり。麥ひき場となり石臼あるあり。民家ノ一部トナルアリ。犬盛ニ吠ユ。碧霞観アリ。煉瓦の門を二つ三つくぐる。石をつみし塀、枯茨をのせる。○山は皆頂平なり。畑は粟多し。「地しばり」の黄花。

元版 p825/現行版 p386

【「雑信一束」十七　石仏寺】〔大同石仏寺（雲崗石窟）〕

【犬盛ニ吠ユ】前掲犬養健宛て書簡（一九二五・七・一七）に、「然れども大同石仏寺を御らんになり候はゞ他は御覧にならずともよろしかるべき乎石仏寺のある村には猛犬数頭あり、東方の客を見れば忽ち狺狺の声を為す、あれだけは思ひ出しても無気味に御座候」とアドバイスをしていた。

士官学校出身）
るあり。並木をつくるあり、（閻は日本
水まき車をひくあり　人道車道を分て
れいなり　牌楼にその訓諭あり、中牛の
とむ（太原にあり）その為大同府内き
山西督軍閻錫山　内治につ

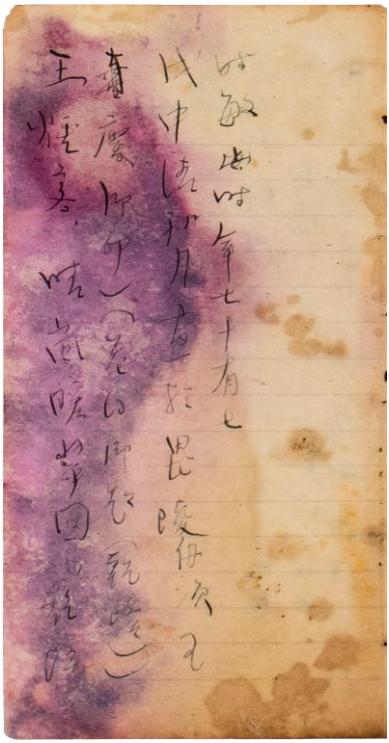


87

〔大同か〕

○山西督軍閻錫山、内治につとむ。（太原にあり）その爲大同府内きれいなり。牌樓にその訓諭あり。牛の水まき車をひくあり、人道車道を分てるあり、並木をつくるあり。（閻は日本士官學校出身）

元版 p825/現行版 p386



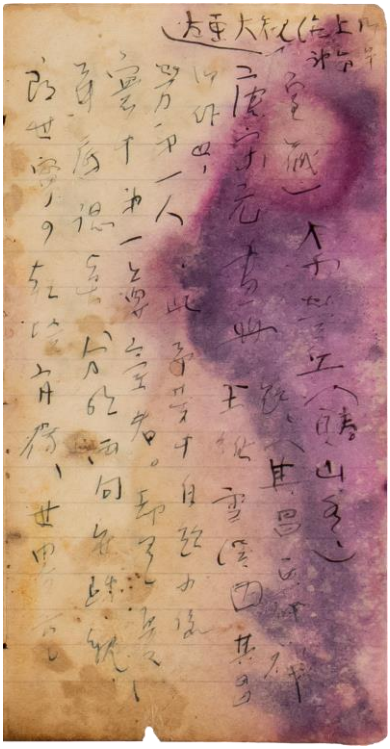
88

○王煙客、晴嵐暖翠圖。（乾隆慶御印。）（卷後御題（乾隆）。）戊申清和月畫於毘陵舟次王時敏當時年七十有七。

元版 p825/現行版 p386

時敏當時年七十有七
戊申清和月畫於毘陵舟次王
中慶御印）（卷後御題（乾隆））
王煙客、晴嵐暖翠図（乾隆

〔陳宝琛宅〕（本稿一一五頁に同じ）



89

（無上御筆
神品
名画大観
室藏）李營丘（春夏山水、）
唐宋元畫册　題、（其昌画中禅
王維雪溪図其昌
旧作也、
勞第一人。此予夢中自題小像
寰中第一尊崇者。却是憂
華底認眞、分明両句弁疎親、
郎世寧の乾隆肖像、世界空

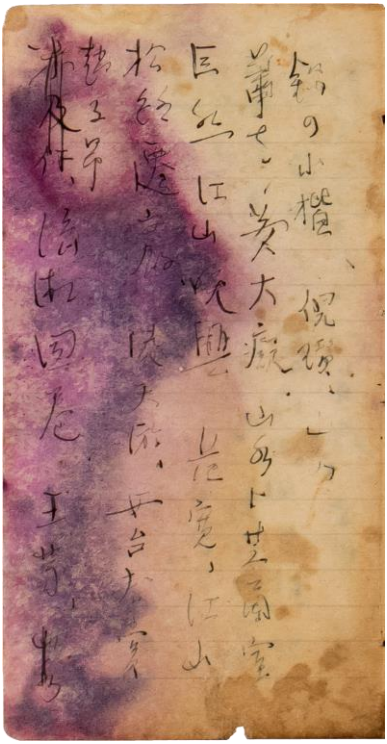
〔陳宝琛宅〕（承前）

【郎世寧（中略）自題小像旧作也】前掲秦剛「陳宝琛の書が語る、芥川と故宮名画の一期一会」によると、乾隆帝が「唐宋元畫冊」を愛着するあまりに、郎世寧に肖像画を描かせて画冊の巻頭に貼り付けて、自ら本詩を題したという。

【名画大観】「唐宋元畫冊」の別名。乾隆帝『御製詩初集』巻三七（一七四九、ハーバード大燕京図書館蔵）に、「題名画大観冊」として詩一二首が収録されており、それぞれ「名画大観」に収めていた一二枚の名画と対応していると考える。一二首中、最初の二首は「王維雪溪」と「李成松崖水榭」である。

○郎世寧の乾隆肖像。世界空華底認眞、分明兩句辯疎親、寰中第一尊臺者、却是憂勞第一人。此予夢中自題小像舊作也。○唐宋元畫册。王維雪溪圖其昌題、（其昌畫禪室藏）李營丘（春夏山水、）○名畫大觀。（無上神品御筆）

元版 p825/現行版 p386



銘の小楷、倪瓚、山水。
蕭寺、黄大癡、山水ト芝蘭室
巨然　江山晩興　范寛、江山
松路遷巖、陵天游、丹台春賞
趙子昂
米友仁、瀟湘図巻。王蒙、山水

90

○趙子昂、瀟湘圖卷。王蒙、松路遷巖。陵天游、丹臺春賞。巨然、江山晩興。范寛、江山蕭寺。黄大癡、山水ト芝蘭室銘の小楷。倪瓚、山水。

元版 p825/現行版 p386

〔陳宝琛宅〕（承前）

【米及仁】正確には「米友仁」。北宋末～南宋初期の書家・画家。代表作の一つに「瀟湘図巻」（上海博物館蔵）があるが、「名画大観」には収録されていない。なお、米友仁第二跋に続く複数の跋文の末尾に、陳宝琛の跋もあるという（未見）。

【趙子昂】趙孟頫。前掲乾隆帝「題名画大観冊」一二首中、第三首は「趙孟頫洞庭秋景」、第四首は「趙孟頫楚江秋意」である。

【王蒙（中略）倪瓚、山水】「題名画大観冊」の第五首から第一〇首までは、「王蒙倣燕文貴仙山図」、「陸天游丹台春賞」、「巨然江山晩興」、「范寛江山蕭寺」、「黄公望芝蘭室図」、「倪瓚春山図」である。

狩野派と似たり　賛

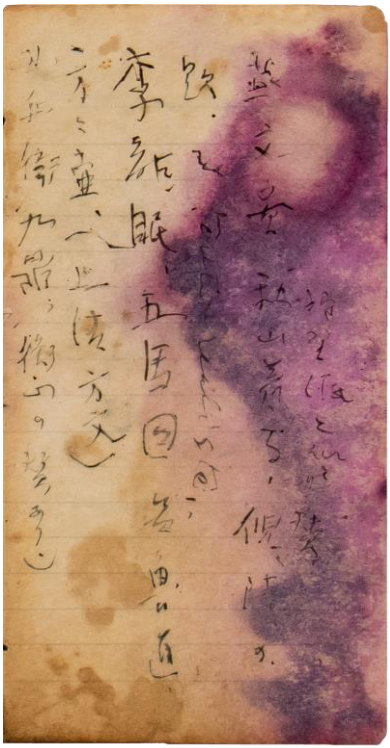
燕文貴、秋山蕭寺、倪、陸の、

題。□toute realiste,

李龍眠、五馬図　黄魯直

方々壺、（上清方文）

丹丘衛九鼎。（衡山の賛あり、）



91

〔陳宝琛宅〕（承前）

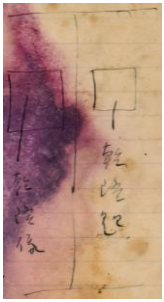
【衛九鼎】「題名画大観冊」の第一一首は「衛九鼎溪橋築蹇」である。

【方々壺】「題名画大観冊」の第一二首は「方方壺仿米襄陽夏山煙雨」である。

【李龍眠、五馬図】東京国立博物館蔵。芥川が北京でこの絵を見てから、二〇一九年に同館の特別展「顔真卿　王羲之を超えた名筆」で展示されるまでの経緯は、張明傑「伝世名画李公麟『五馬図』為何会流失日本？」（『澎湃新聞』、二〇一九・一・一八）、秦剛「芥川龍之介為何能観賞到故宮蔵画『五馬図』？」（『澎湃新聞』、二〇一九・一・二八）を嚆矢に、多くの日中のメディアに取り上げられた。

○丹兵衛九鼎。（衡山の賛あり、）方々壺。（上清方文）李龍眠、五馬圖、黄魯道題、（toute realiste）。燕文貴、秋山蕭寺、倪、陸の賛。（狩野派と似たり）

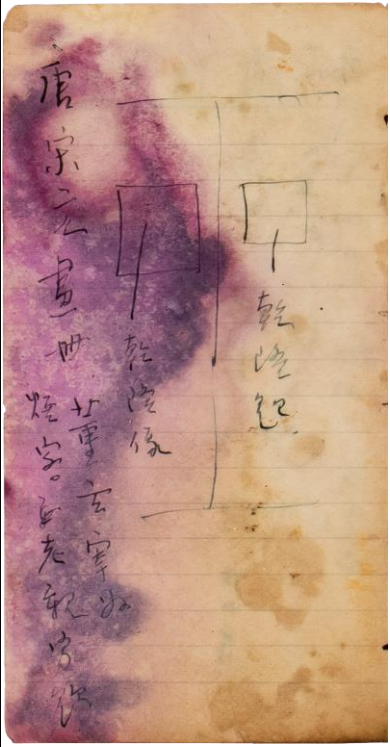
元版 p825/現行版 p386



唐宋元畫冊　董玄宰為煙客□老親家題

乾隆題

乾隆像

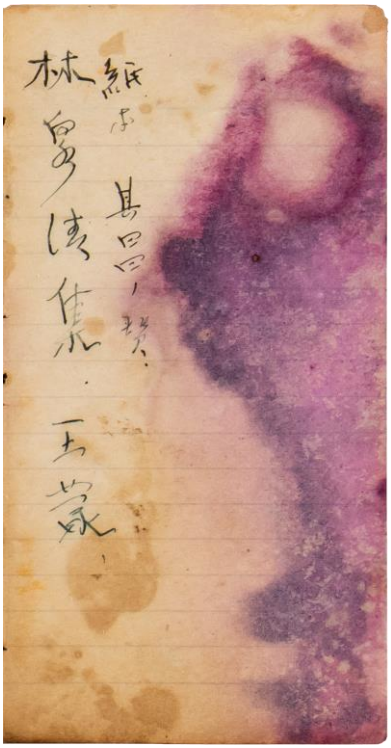


92

〔陳宝琛宅〕（承前）

○唐宋元畫冊、煙客老親家題董玄宰爲。

元版 p825～826/現行版 p386



93

紙本　其昌ノ賛。
林泉清集。王蒙、

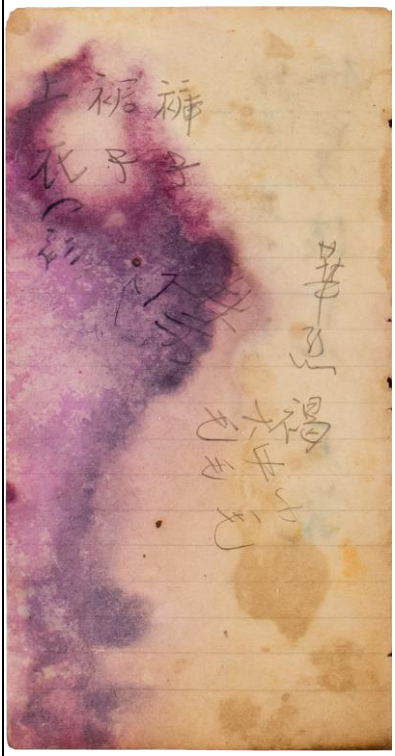
元版 p826/現行版 p386

〔陳宝琛宅〕（承前）

○林泉清集、王蒙、紙本、其昌ノ賛。

華絲褐　小毛
參　中毛
大毛

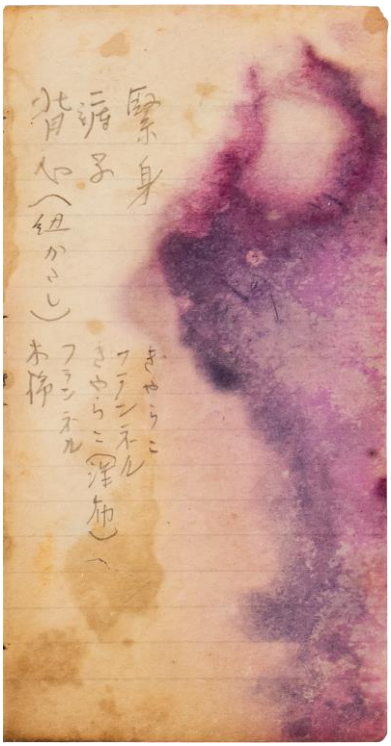
褲子
裙子
上衣（衫



94

○上衣（衫）。裙子。褲子。

元版 p826/現行版 p387



95

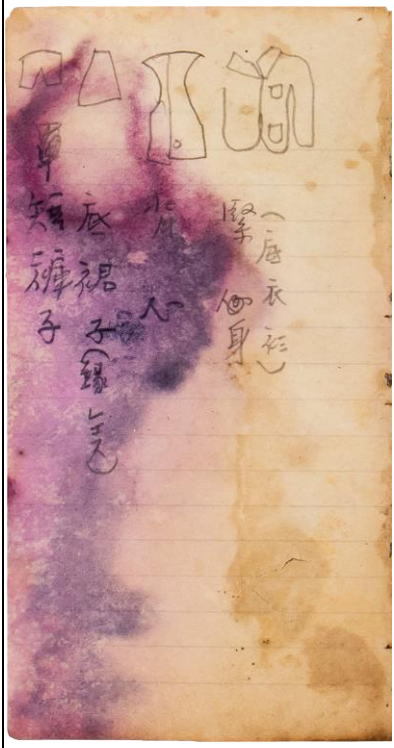
緊身
袴子
背心（紐かたし）

きやらこ
フランネル
きやらこ（洋布）
フランネル
木綿

○背心（紐かたし）、木綿、フランネル。褲子、きやらこ（洋布）、フランネル。緊身、きやらこ。

元版 p826/現行版 p387

（底衣衫）
緊　心身
背　心
底裙子（縁レエス）
車短褲子



96

○短褲子。底裙子。（縁レエス）背心。緊身。
（底衣衫）

元版 p826/現行版 p387

裙　子（襞あり）

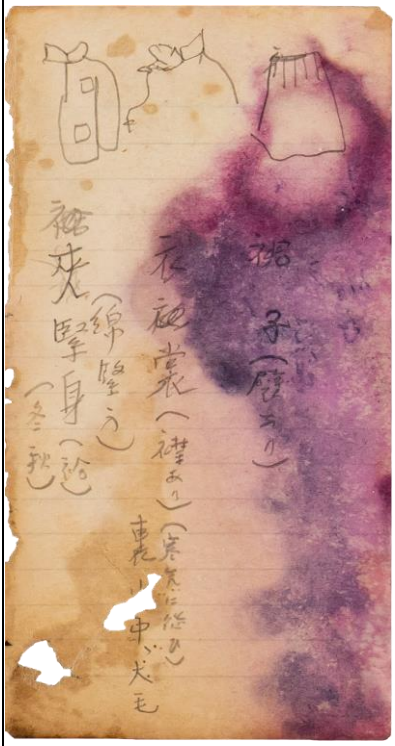
衣彩裳（襟あり）（寒気に従ひ）

裏小、中、大毛

（綿緊身）

袷□夾緊身（袷）

（冬秋）



97

夾緊身。（袷）（綿緊身）（冬秋）衣裳。（襟あり）（寒氣に従ひ裏小、中、大毛）。裙子。（襞あり）

元版 p826/現行版 p387

98

○靴。大部分ハ西洋靴（皮靴）。上下共紅は新妻のみ。親戚知人に慶事ある時は裙子のみ紅し。褲のみなるは娘。

元版 p826/現行版 p387

褲のみなるは娘。
慶事ある時は裙子のみ紅し
上下共紅は新妻のみ、親戚知人に
靴　大部分ハ西洋靴（皮靴）

99

中辮子
双孖髻
鳳冠
娘　この髷は皆髪を分く

○鳳冠。○双孖髻、辮子――娘（この髷は皆髪を分く）。

元版 p826/現行版 p387

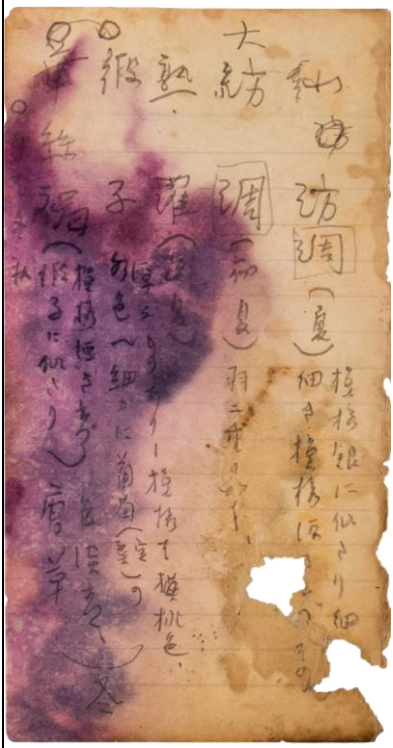
小紡紡綢（夏）　模様銀に似たり細き
細き模様浮き出づ、その

大紡　綢（初夏）羽二重の如し、
熟　羅（眞夏）

○緞　子　浮ぶものあり、模様は桃色、
水色へ細かに葡萄（実葉）の

○華絲褐　模様浮き出づ　色淡青、
緞子に似たり　唐草　冬

○印は冬秋



100

○華絲褐。（緞子に似たり、模様浮き出づ）唐草色淡青、冬。○緞子。水色へ細かに葡萄（實葉）の浮ぶものあり、模様は桃色、冬。○熟羅。（眞夏）○大紡綢。（初夏）羽二重の如し。○小紡綢。（夏）細き模様浮き出づ、その模様銀に似たり、細き
〔○印は冬秋〕

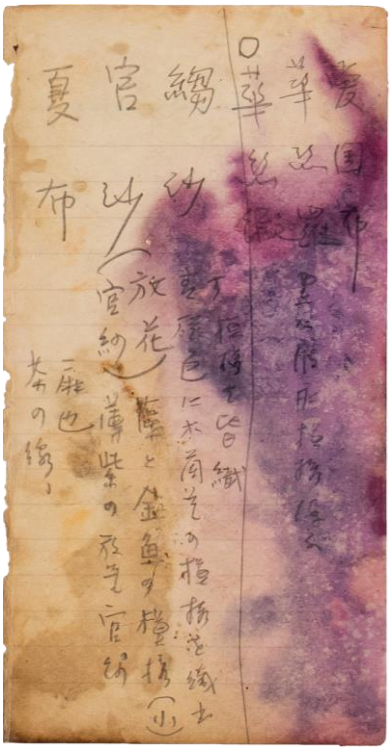
元版 p826/現行版 p387

愛国布
華絲羅　黒に波形模様浮ぶ
○華絲緞

綯　紗　す　模様は皆織
青磁色に木蘭花の模様を織出

官　紗（放花官紗）藻と金魚の模様（小）
薄紫の放花官紗

夏　布　麻也
茶の線、



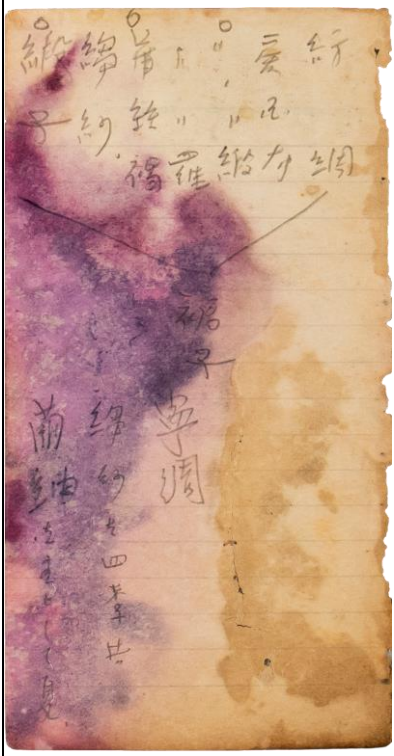
101

茶の線。○夏布。麻也。○官紗。（放花官紗）薄紫の放花官紗、藻と金魚の模様（小）。○綯紗。青磁色に木蘭花の模様を織出す、模様は皆織。○華絲緞。○華絲羅。黒に波形模様浮ぶ。○愛國布。

元版 p826/現行版 p387

紡綢
愛国布
○〃、〃緞
〃〃羅
華絲褐
裙子
綯紗、
○緞子

寧綢
綯紗は四季共
繭紬は主として夏、

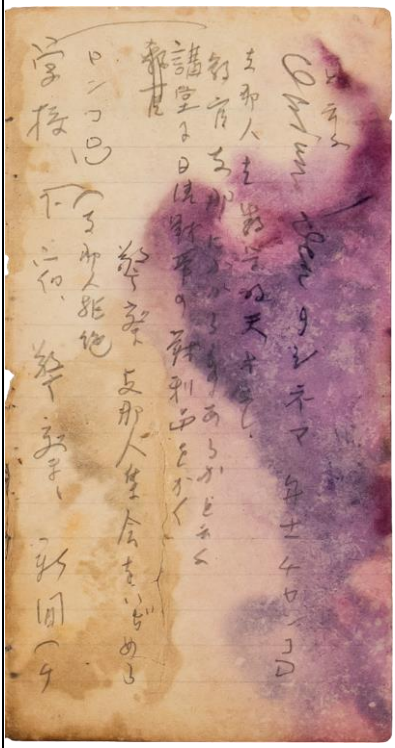


102

○緞子。綯紗。華絲褐。華絲羅。華絲緞。愛國布。紡綢。――裙子。○繭紬は主として夏。綯紗は四季共。寧綢。

元版 p826/現行版 p387

と云ふ
Opium Den のシネマ　弁士チヤンコロ
支那人は数学的天才なし。
教官支那にかかるものあるかと云ふ
講堂に日清戰爭の戰利品をかく
教宿　　警察　支那人集会をいぢめる
ヤンコロ）　（支那人拒絶
学校、　下宿、警察、新聞（チ



103

【「雑信一束」十八　天津】〔天津〕
当時の天津は上海同様、諸外国の租界になっていた。本頁は阿片問題を含め、天津にいた中国人と日本人を含めた外国人との関係を素描したものと思われる。芥川がこのような天津を快く思っていないことは、一九二一年七月一一日に松本鎗吉に宛てた書簡の「索漠たる蛮市我をして羈愁万斛ならしむ一日も早く帰国の予定」や、同一二日に小穴隆一に送った絵葉書の「天津へ来た此処は上海同様蛮市だ北京が恋しくてたまらぬ」から窺える。

○學校。下宿。（支那人拒絶）警察。新聞。（チヤンコロ）○講堂に日清戰爭の戰利品をかく。教官支那にかかるものあるかと云ふ。支那人は數學的天才なし。○警察支那人集會をいぢめる。○Opium Den のシネマ辯士チヤンコロと云ふ。

元版 p826～827/現行版 p387

壁上の掛物、啖吐。
壁紙（洋風） Bed 、鏡台、床は瓦、
門（対聯）門房、中庭、房。
ともし行く妓あり、
電燈をともすもの。人力車に六個の火を
共に画を出すもの、金額札の周囲に
は額中、刺繍にて字を出すもの、字と
標札、金属（金 or 銀）赤字の名、又

104

○標札。金屬（金 or 銀）赤字の名。又は額中、刺繍にて字を出すもの。字と共に畫を出すもの。金額札の周圍に電燈をともすもの。人力車に六個の火をともし行く妓あり。○門。（對聯）門房。中庭。房。壁紙（洋風）。Bed. 鏡臺。床は瓦。壁上の掛物。啖吐。

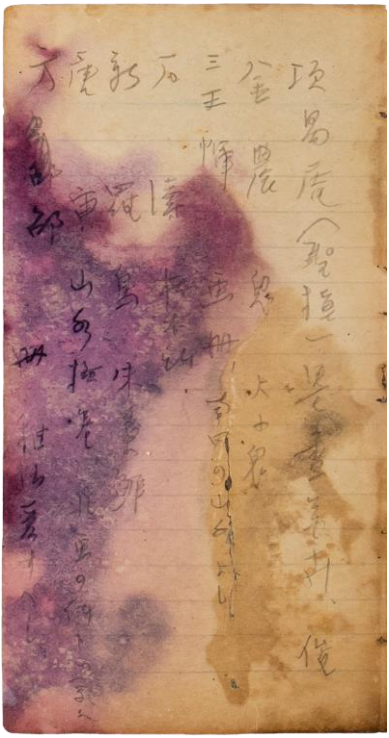
〔天津（常盤ホテルか）〕
ベッドや鏡台についての記述があるため、客室の描写と思われる。姚紅によると、芥川は天津滞在中に、日本租界の繁華街寿街通りにあった常盤ホテルに宿泊していたという〔「一九二一年芥川龍之介の天津体験」（『日本語と日本文学』第五一号、二〇一〇・八）を参照〕。

元版 p827/現行版 p388

105

臘反芳□

全集未収録



106

項易庵（聖模）墨畫花卉、俊
金　農　鬼　大小鬼
三王惲　画册、南田の山水よし
石　濤　枯木竹。
新　羅　鳥　朱葉鮮。
唐　寅　山水横卷、北画の体を学ぶ
方□□□　冊　稚拙愛すべし、

○方邱、稚拙愛すべし。唐寅、山水横卷、北畫の體を學ぶ。新羅、鳥、朱葉鮮。石濤、枯木竹。三王惲、畫册、南田の山水よし。金農、鬼、大小鬼。項易庵（聖模）、墨畫花卉、俊。

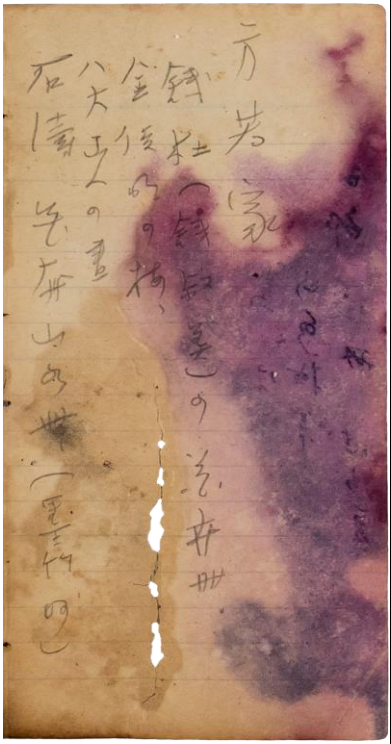
元版 p827/現行版 p388

【「支那の画」蓮鷺図、鬼趣図】〔天津（方若宅）〕ここで列挙されている絵と、芥川の「支那の画」（『支那美術』、一九二一・一〇）との関係、並びに方若の経歴については、前掲姚紅「一九二一年芥川龍之介の天津体験」に詳述されている。

【方□】李方膺（方邹）のことか。李は清の乾隆年間、揚州で活躍した画家で揚州八怪の一人。

【項易庵（聖模）】項聖謨。明末の文人画家。

方若家
錢杜（錢叔美）の花卉册。
金俊明の梅、
八大山人の畫
石濤　花卉山水册、（墨竹、妙）



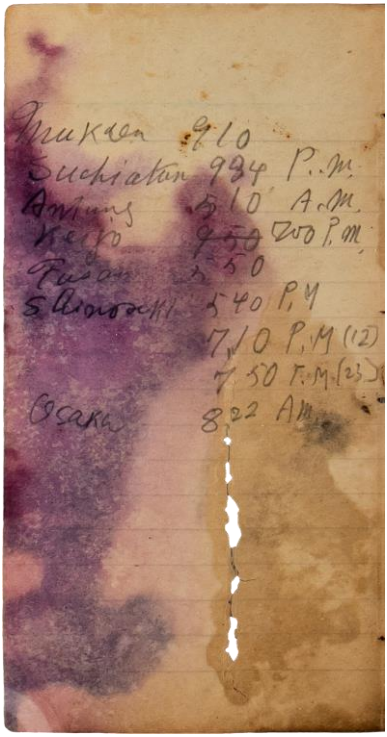
107

【「支那の画」蓮鷺図、鬼趣図】〔天津（方若宅）〕

石濤、花卉山水册、墨竹妙。八大山人の畫。金俊明の梅。錢杜（錢叔美）の花卉册。方若家。

元版 p827/現行版 p388

Mukden 910
Suchiatun 934 P..m,
Antung 510 A. m,
Keijo ~~950~~ 700 P. m,
Fusan 550
Shimoseki 540 P. M,
7.10 P. M（12）
7 50 P. M（23）
Osaka 8.22 Am,



108

全集未収録

【「雑信一束」十九　奉天、二十　南満鉄道】〔奉天（盛京、今の瀋陽）、蘇家屯、安東、京城、釜山、下関、大阪〕

南満洲鉄道経由、奉天から大阪までの主要駅の発着時刻。水沢不二夫「芥川全集「手帳（六・七）」未収録分」（『近代文学注釈と批評』五、二〇〇三・五）に詳細な注釈がある。

筆記用具一覧表

前稿で述べたように、前稿及び本稿における翻刻に際しては画像編集ソフトPhotoshopを用いて色調を補正している。ただし、メモでは複数の筆記用具が使われているが、おしなべて黒く補正しているため、それぞれの区別がしにくくなっている。そのために、補正前のオリジナルデータで筆記用具の色を確認し、一覧表を作成した。本表は、筆記用具の色のほかに、翻刻対象外の頁の基本状況（空欄・欠損）も掲載している。

本表のように、「手帳七」で用いられた筆記用具を頁順に並べると、万年筆（ブラック）――万年筆（ブルーブラック）――鉛筆――万年筆（ブルーブラック）――鉛筆となる。ただし六六頁から八〇頁までの間には、毛筆と鉛筆、万年筆（ブラック）と鉛筆、そして鉛筆と万年筆（ブルーブラック）のように、二種類の筆記用具が併用された頁が複数確認できる。なかんずく毛筆は携帯に適さないため、二種類中の一方は、見学時より後に加筆したものであると思われる。また「七四？頁」は空白の頁となっており、その前後の頁に書き込まれたメモも、頁ごとに独立した内容となっている。手帳を使う場合、次に書く予定のことに備えて頁を空けることもあるので、「七四？頁」の前後は一旦空けられ、のちに埋められた可能性を排除できない。したがって六六頁から八〇頁までに記された内容は、実際に芥川が経験した順序や記入した順序と、頁順とが一致していない可能性がある。芥川の北京滞在中の足取りを正確に分析する際に、注意すべきことであろう。

	鉛筆	万年筆（ブルーブラック）	万年筆（ブラック）	毛筆	空欄	欠損
1						○
2						○
3			○			
4					○	
5					○	
6					○	
7					○	
8					○	
9					○	
10		○	○			
11		○				
12		○				
13		○				
14		○				
15		○				
16		○				
17		○				
18		○				
19		○				
20		○				
21		○				
22		○				
23		○				
24		○				
25		○				
26		○				
27		○				
28		○				
29		○				
30		○				
31		○				

	鉛筆	万年筆（ブルーブラック）	万年筆（ブラック）	毛筆	空欄	欠損
32	○					
33	○					
34	○					
35	○					
36	○					
37	○					
38	○					
39	○					
40	○					
41	○					
42	○					
43	○					
44	○					
45	○					
46	○					
47	○					
48	○					
49	○					
50	○					
51	○					
52	○					
53	○					
54	○					
55	○					
56	○					
57	○					
58	○					
59	○					
60	○					
61	○					
62	○					

	鉛筆	万年筆（ブルーブラック）	万年筆（ブラック）	毛筆	空欄	欠損
63	○					
64	○					
65	○					
66	○			○		
67?	○					
68?			○			
69?						○
70?						○
71?						○
72?						○
73?	○		○			
74?					○	
75			○			
76	○	○				
77	○					
78	○	○				
79	○					
80	○	○				
81	○					
82	○					
83	○					
84	○					
85	○					
86	○	○				
87		○				
88		○				
89		○				
90		○				
91		○				
92		○				
93		○				

	鉛筆	万年筆（ブルーブラック）	万年筆（ブラック）	毛筆	空欄	欠損
94	○					
95	○					
96	○					
97	○					
98	○					
99	○					
100	○					
101	○					
102	○					
103	○					
104	○					
105	○					
106	○					
107	○					
108	○					
109					○	
110					○	
111					○	
112					○	
113					○	
114					○	
115					○	
116					○	
117					○	
118					○	
119					○	
120					○	

注

（1）前稿にも記したように、この異同に気付いたきっかけは伊藤一郎のご教示である。重ねて御礼申し上げる。

（2）〈普及版全集〉の内容見本（一九三四・九）に掲載された「普及版芥川龍之介全集編纂につき謹告」には、「今回増訂普及版芥川龍之介全集を刊行致しますに当り、編纂・校正上にも前回の全集により一層の厳密正確を加へたく、今回も再び直接原稿に基いて校合致さうと思ひます」と記されている。

（3）「後記」（『芥川龍之介全集』第一二巻、岩波書店、一九七八・七）の冒頭に記されている。

（4）「手帳（一―十一）」の「後記」。書誌情報は注（3）に同じ。

（5）注（3）に同じ。

（6）石割透「芥川龍之介の手帳やノート断片―藤沢市文書館所蔵「葛巻文庫」から」（『有鄰』第三六九号、一九九八・八）に詳しい。

（7）「後記」（『芥川龍之介全集』第二三巻、岩波書店、一九九八・一）中、「手帳」と題された概説より引用。

（8）前述したように、〈前回全集〉の「後記」においては、〈元版全集〉の「手帳」と〈普及版全集〉の「手帳より」との異同が指摘されている。一方で、〈現行版全集〉第二三巻では原資料の確認が中心となり、その「手帳」の「後記」に、〈普及版全集〉所収本文の問題についてはほぼ言及されていない。要するに、〈現行版全集〉を中心に研究を進める場合、〈普及版全集〉にあった問題に気付くことが難しい。

（9）注（4）に同じ。

（10）注（2）に同じ。

（11）〈元版全集〉の「月報」第八号（一九二九・二）に掲載された「編輯者のノオト」による。

（12）注（11）と同様に「編輯者のノオト」に記されている。

（13）〈前回全集〉「軽井沢日記」の「後記」が指摘している。書誌情報は注（3）に同じ。なお、該当資料は「「軽井沢日記」遺稿」として、前掲『図版2』に収録されている。

（14）この三箇所は〈現行版全集〉において、それぞれ【表一】の「手帳十」の末尾、「手帳十一」の冒頭と末尾に当たる部分に翻刻されている。

（15）そのうち、一つ目の断片は「細木香以ノート」として、前掲『図版2』で確認できる。

（16）注（2）に同じ。

（17）注（2）に同じ。

（18）注（2）に同じ。

（19）「3」から「7」までか。「1」と「2」は原稿用紙の九行目以降が切り取られ、どこの原稿用紙か確認ができない状態である。ただし原稿用紙の色から推するに、おそらく「1」と「2」も、後続と同じものが使われていると思われる。

（20）石割透「支那游記ノート」の解説。山梨県立文学館編『芥川龍之介資料集　解説』、一九九三年一一月

（21）石割透「堀辰雄筆写の「開化の殺人附記」など」の解説。書誌情報は注（20）に同じ。

（22）注（11）と同様に「編輯者のノオト」に記されている。

（23）「国子監」に関しては、石割が述べたように、芥川の「北京日記抄」などの紀行文には言及されていない。「手帳七」のほかの頁にも、「国子監」と分かる情報は記されていないが、堀が【図二】は「国子監」であると分かった理由は、おそらく芥川旧蔵のガイドブック『北京』（丸山昏迷、一九二一年三月。日本近代文学館蔵）を参照したためと思われる。同書には、赤鉛筆による傍線や○で囲んだ箇所が複数あり（一三八頁・一四二頁・一五四頁）、一五四頁の「国子監」の紹介に、「国子監」の三文字は赤鉛筆によって囲まれている。これらの書入れが堀によるものかどうかは不明であるが、「手帳七」の増訂に際して、参照した可能性は排除できないであろう。

（24）ただし芥川の直筆資料等を管理していた葛巻が、芥川の遺稿に意図的な改変を加えて〈元版全集〉や〈普及版全集〉に掲載したことは、小谷瑛輔「第十二章　可能性に賭けられた伝達――「〔題未定〕」と坂口安吾「文学のふるさと」」（『小説とは何か？――芥川龍之介を読む――』ひつじ書房、二〇一七・一二）、同「芥川龍之介の遺稿「人を殺したかしら？」の諸問題」（『敍説Ⅲ』二〇号、二〇二二・八）に指摘されている。当時、「手帳六・七」を含む手帳の原資料も葛巻の管理下にあった。堀が清書した原稿を「手帳より」として掲載するか否かという判断にも、葛巻が関わっていた可能性がある。

（25）水沢不二夫「芥川全集「手帳（六・七）」未収録分―【梗概】新版全集未収録分の翻刻及び書簡、『支那遊記』、『湖南の扇』をめぐる注釈」、『近代文学注釈と批評』五、二〇〇三年五月

（26）関連する右頁は前稿の五三頁参照。

※翻刻を除いた引用は、適宜新字体に改めた。本稿で掲載した図版を提供して下さった藤沢市文書館及び山梨県立文学館に、心より御礼を申し上げる。